
小さな魔女とファフニール

黒猫時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな魔女とファフニール

【Nコード】

N4437P

【作者名】

黒猫時計

【あらすじ】

魔女の帽子屋根の家に住む、妖しげな醜い老婆ガーネットと共に暮らす小さな魔女レティ。その小さな身体には秘めたる力があつた。ある時レティはガーネットに「ドラゴンに会った」と告白する。そのドラゴンは、かつてガーネットらが封印した黒竜だった。

洞窟に近付くな、ガーネットはそう言つて釘を刺すもレティは聞かず、とある目的の為に洞窟へ足繁く通う。その目的が達成された時、ガーネットが想像もしなかった真実が明らかとなる。

ガーネットが知った真実とは、そしてレティの目的とは一体……。

同シリーズである「ライオンハート」へ話が続きます。
オムニバス短編集「ジョブ・ストーリー」の1作目です。

夕暮れ時。小高い丘の上に建つ、まるで魔女のかぶる帽子のような形をした屋根の家へと、1人の少女が歩いていく。

年の頃は6、7歳といったところだろうか。黒いローブを着て、屋根と似たような形の、つばの広い大きな帽子をかぶっている。そして腕には、身の丈ほどもある植物を沢山抱え、前を見辛そうにしていた。

——突如、グルルルツ、という獣の唸り声を聞いた少女は、ハツとして振り返る。

「わあっ！」

するとそこには、犬のような姿をした短足の2匹の魔獣が、今にも襲ってきそうに、涎を垂らしてエサを捕食しようと身構えていた。

「なんなの、また来たの？ わちになにかしたらババに言いちけてやるんだから！」

そう少女が言い放つと、“ババ”というワードを聞いた魔獣たちは、ビックリしたように目を見開き顔を見合わせると、尻尾を巻いて一目散に逃げ去っていった。

魔獣たちが逃げたのを見て、少女はホッとため息をつく。そして踵を返し、足早に目の前の家へと走っていきそのドアを開けた。

家の中はとにかく怪しげな道具で溢れていた。

壁に設置された棚には、大中小さまざまな大きさのフラスコが置

いてあり、空の物はほとんどなく妖しい色をした液体が入れられている。

他には頭蓋骨や、天井から吊るされているのはトカゲだろうか、すでにカラカラに干からびている。部屋の隅には、ゴボゴボと音をたて沸騰している大きな釜が置かれており、その紫色をした液体の中では色々な物が煮られていた。

「ババ！ 今帰ったの」

“ババ”と呼ばれたその人は椅子に腰掛け、テーブルに向かって本を読んでいる。年齢不詳としか言いようがないその醜い容姿。よほど本に集中しているのか、おおよそ童話にでも登場しそうな人相の悪い老婆が、しゃがれた声で適当に返事をする。

「んー、ご苦労さーん」

「ババ、これどこに置いておくの？」

少女は先ほど採取してきた植物の置き場所を訊ねると、

「そんなものは適当に置いておけばいいんだよ」

と、老婆はさも面倒くさそうに答える。

「うん」

それに頷きはしたものの、少女はその場から動こうとはしなかった。

「ババ……適当ってどこに置けばいいの？」

少女は適當の場所を、再度老婆に訊ねる。

「いちいち面倒くさい子だね。適當つつたらその辺に置けばいいって、いつも言ってるだろう？」

皺くちやの顔に、更に眉間に皺を寄せて老婆は言い放つ。

「うん、じゃああそこに置くね」

そう言つて、少女は釜の上の板に植物を置こうとした。すると――

「そこはダメだつていつも言ってるだろう。まったく、落ちたら混ざっちまうだろうに。その実と葉だけとつて籠にでも入れて、枝は外の魔獣にでもくれてやりな！ これじゃちつとも集中できやしないじゃないのさ」

ぶつくさと言いながら、老婆はティーカップを持ちキッチンの方へと歩いていった。

少女は目をぱちくりとさせながら一人立ち尽くす。

「怒られちゃった」

あまり反省していない様子でその場に座り、少女は老婆に言われた通り植物の実と葉だけを落としていく作業に取り掛かる。鉤爪状の道具を使って器用にそれを削いでいくと、実と葉が空中に舞い、辺り一面に散らばつていった。

やがて綺麗にそれらを取り終えると、丸裸になった枝の束を持ち外へと出て行く。

夕日も沈みかけの時間。まだほんの少しだけ明るい丘に立つ少女。

すると100mほど前方に、先ほどの2匹の魔獣が座っているのが見えた。

「あつ！ お犬さん！！」

大きな声で魔獣を呼ぶ。魔獣たちは一瞬ビクつき顔を見合わせる、と、ソロソロと少女のもとへ歩いてくる。

「はいっ！ これあげるの！」

2匹の魔獣は揃って愕然とする。差し出されたのは肉ではなく、実も葉もないただの枝だったからだ。

微笑みながら手を差し出す少女を上目遣いで見上げ、肉をくれなしかと目で催促する魔獣。その物乞いするような視線をさらりと流すと、少女は魔獣達に言った。

「ババが魔獣にあげろって言ったから、貰ってくれないとわちが怒られるの」

二度目の“ババ”というワードが、またもや魔獣たちを戦慄させる。その短い足はがくがくと震え、体に似合わぬほど長い尾は綺麗に巻かれ、鋭い牙はがちがちと音をたてて鳴る。

2匹は渋々、揃って少女の手元にある枝をくわえると、とぼとぼと歩き去っていった。

「寄り道しないで帰るんだよ」

少女の言葉に振り返り、再び魔獣は歩き出す。手を振ってそれを見送ると、少女は家へと戻る。

ドアを開けて中へ入ると、目の前で老婆が腕を組み目を閉じて立

っていた。

「ババ、そんなところで何ちてるの？」

「何してるのじゃないよ！ あれはなんだい？」

老婆は床を指差して言った。その先には、先ほど頑張つて削いだ……いや、散らかした植物の実と葉っぱが散乱している。

「あれはあとから片付けようと思ったの」

そう言つと、老婆は呆れた様子で首を横に振つた。

「嘘をお言い。忘れてたんだらう？ まったく。そいつを片付けるまで晩飯はなしだからね」

そう言つて先に食卓に着き、老婆は一人で食事を始める。

少女は壁に立てかけてある、大きな箒と塵取りを持ち、自分が散らかした物を掃いて片付ける。

そして塵取りに集め終わると、それらを小さな籠へと移す。

「ババ、終わったの」

「ん。じゃあ手を洗つといで」

少女は洗面所の方へと走っていき、ちゃっちやと手洗いを終わらせる。そして戻ると老婆と同じテーブルに着き、少し遅い食事を始めた。

今日のメニューは鳥獣のローストに、魔草のサラダ、そしてかぼちやのスープにパン。

ボリユーミーな食卓の前に、少女は目を輝かせている。

「なにしてんだい、さつさと食っちまいな。片づけが面倒だろう」

そう言われ、魔草のサラダにフォークを突き刺した。それを口に放り込んだ瞬間、少女の動きがピタリと止まる。

「……ババ、この草マズイの」

涙目になりながらも、少女は老婆に文句を言う。

「なに言ってんだい、魔力の底上げには、魔草をかじんのが手っ取り早いんだよ！」

「それ、嘘だもん……」

老婆の力説などまるで聞かず、椅子から下りてサラダを捨てに行こうとする少女。

「ちょいと待ちな！ 何してんだい」

それを見過ごすわけにはいかず、老婆は制止する。

「だって、不味いんだもん」

「まーったく、しょうのない子だねえ。その皿をテーブルに戻しな」

自分の持つサラダを一度見つめ、少女は言われた通りテーブルに皿を置く。すると老婆は置かれた皿に手をかざし、魔法を唱え始めた。

かざした手をどけた時、皿の上にのった魔草はすでに凍っており、「砕っ！」という掛声と同時に、魔草は粉々に砕け散った。

「こいつをスープに入れて飲みな」

「ババ！ それ、氷の魔法……いつ覚えたの！？」

少女は驚いた。まさか老婆が氷属性の魔法を使えるなんてと。

「まったく、なんでこのあたしが氷なんて忌々しい魔法を使わなきゃならないんだい。お前が好き嫌いするから、こんなものを覚えただよ！ だからしっかりと食べな」

どうやら老婆は、少女の為にわざわざ氷の魔法を習得したようだ。自分が最も苦手とする属性魔法。それを習得することは相当な困難で難解なことを、この小さな少女でも知っている。

何故ならこの老婆の専門とするのは炎。しかも相当高レベルのウィッチだ。それ故に、正反対の属性を扱うためにはそれ相応の努力と忍耐、そして才能がいる。

「分かった。ちゃんと食べるの」

自分の為にしてくれたんだと頷くと、少女は砕かれた魔草の粉末をかぼちゃのスープへと混ぜる。黄色いスープはかき混ぜることに黄緑色へと変化し、かぼちゃのスープが大好きな少女はその見た目にガツクリと肩を落とした。

「とても不味そうなの……」

「文句をお言いじゃないよ！」

ちらりと老婆を見る少女。老婆は顎で早く食べると合図をする。仕方なくスープをスプーンですくってみる。嫌そうな顔をしながらも、そのままゆっくりと口へと運ぶ。そして目をギュツと閉じ喉を鳴らしてスープを飲み込んだ。

「……ん？ 草の味がしないの」

「そりやそうだろう、細胞も全て壊してるからね。けどその魔草は細胞が死んでも、栄養価だけは残る優れもんだよ。分かったらとつとと食べて、さっさと片付けな」

老婆は台所へと用の済んだ食器を片付けていく。少女は少し冷めたローストチキンを食べて、パンをかじりスープを飲む。

口をもぐもぐさせながら、少女はあることを思い出した。

「ババ！」

台所に立つ老婆の背中に向かって声を上げる。

「んー？ 今度はなんだい」

老婆は、また何かあったのかと、半分面倒くさそうに聞き返す。

「わち、ドラゴンに会ったの」

よほど楽しかったのだろう。少女は右手に持ったスプーンを掲げながらウキウキした様子で話す。

「そいつは良かったねー。それで？ レッドドラゴンの尻尾でも切り落としてきたかい？ それとも、髭でも引っこ抜いてきたのかい？ もしかしたら、牙をへし折ってきたのかもしれないねー」

こんな小さな女の子に、そんなことはありえないだろうと思いつつも老婆は適当に相槌を打つ。

少女は首を左右に振ると老婆に言った。

「ちがう。ファフニールに会ったの」

「へえ、そいつは凄いねー……って、はああああ！？ ファ、ファフニール？！」

驚きの声は裏返り持っていた皿は手から滑り落ち、床に落ちてガチャンと音をたてて割れる。両手はワナワナと震え、老婆は空いた口が塞がらない様子だ。

タオルでさつと手を拭き、ニコニコしながら足をバタつかせて椅子に座っている少女へと詰め寄っていく老婆。

「あれほど行っではいけないと言ったのに、お前は行ったのかい？ あの混沌の洞窟に！？」

「うん、わち1人で行ってきたの」

「凄いでしょ？ と言わんばかりに大きな手振りでジェスチャーする少女を、老婆は戒める。」

「うん、じゃない。馬鹿かお前は！」

「うわあ！」

急に荒げられた声に、少女はビックリして椅子から落ちそうになった。

「ファフニールは悪竜なんだよ。喰われても知らないからね」

少女はそんなことないと首を振り、老婆へと反論する。

「ファフニールはいい子なの」

「いい子にしてたら、今頃あんな所であんなことになってないだろう？」

「でもおもちろかつたもん」

「はあ……お前は頭がいいのか悪いのか、よく分からない子だねえ」

老婆は呆れた様子でため息をついた。

「悪竜ファフニールはねえ、村や街を襲って人を大勢喰ったんだ。財宝まで奪って。だから洞窟にああして鎖で縛られてんだよ」

「ファフニールはそんなことしないの。だってわち、食べられなかったもん」

少女はまさかと言った様子で老婆に意見する。こめかみを押さえた老婆は首を横に振った。

「今回は運が良かったただけだ。次はないからね！ 分かったら、もう近付くんじゃないよ！」

そう言つて釘をさすと、老婆は洗い物へと戻っていった。

その丸い背中を見つめ、少女は1人思案する。ファフニールはそんなことしないはず。明日行つて確かめなきゃ、と。

残りの料理を口に放り込み、食器を老婆のもとへと持っていく少女。

「食べ終わったんなら、さっさと風呂にでも入って、とつと寝な」
「うん」

老婆の言葉に頷くと、少女はリビングを出て脱衣所へと向かう。衣服を大雑把に脱ぎ洗濯機の中に放り込むと、バスルームへと入っていった。

かぼちゃの葉の形をしたシャンプーハットを頭にかぶると、少女

はまず髪を洗う。洗っている最中、少女が目を開けることはない。シャワーで髪を丁寧に流し終わると次に身体を洗い、その泡を流し終わるとなみなみに溜まった湯船の中へとダイブした。勢いよく飛び込んだため、大量のお湯がまるで津波のように湯船から溢れ出す。今日も一日頑張った、そう思いながら湯船に浸かり疲れを癒す。10分ほど浸かり、お風呂から上がると老婆の呼ぶ声が聞こえたため、少女は急いで身体をタオルで拭き、パジャマに着替える。そしてリビングのドアを開けると、なにやら怪しい煙が立ち込め霞がかっていた。

「ババ、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないよ！ お前が拾ってきた植物、種類間違えてただろう？」

よく見てみると、煙の出所は調合用テーブルに置かれたフラスコからだった。アルコールランプで熱せられたフラスコの中には青色の液体と、先ほど少女が採ってきた植物の実と葉が入れていた。液体はコポコポと音をたてて湧き上がり、フラスコの口からはモクモクと緑色の煙が立ち昇る。

「そうなの？」

「そうなの！ まったく。ほれ、さっさと換気だよ、か・ん・き！」
「うん」

老婆に指示されて、少女は部屋の窓を全て開けていく。新鮮な空気が部屋の中へと流れ込み、立ち込めていた緑色の煙は少しずつ薄くなり、やがて消えていった。

「あれほど間違え易いからって、何度も教えたろう？」
「でもわち、ちゃんと見たもん」

「見たのなら間違えないだろう」

やれやれといった様子で頭を押さえる老婆。少女は口を少し尖らせて拗ねている。

「まったく、しょうのない子だねえ。もう寝る時間だよ。子供はさつさと寝な」

「ババ、ごめんなさい」

「ん、今度から間違えるんじゃないよ。おやすみ」
「おやすみ」

少女は少ししょんぼりしながら、二階へと繋がる螺旋階段を上がっていく。

老婆はそれを見届け、先ほど落として割ってしまった皿を片付けに入る。

「やれやれ、なんであんな子拾ってきちまったんだろうねえ——」

呟くと、集めた皿の破片を持ち外へと出て行った。

少女は自室に入ると、椅子に座り机に向かう。そして紙とペンを取り出して何かを書き始めた。

どうやら今日持ち帰った植物に関してのようだ。間違えやすい見た目の特徴などを箇条書きしていく。しかも挿絵まで描いている。

……とても上手だとは言えないが。

「ふあゝあ」

小さくあくびをすると、色鉛筆を手に取り挿絵に色を塗っていく。緑に茶色、そして実は桃色だった。

やがて色を塗り終えると、出した道具をちゃんと元の位置へと戻す。片付けないと老婆に怒られるからだ。

片付け終えた少女は眠たそうに目を擦り、ベッドの中へと入っていく。

「明日はファフニールに会わなくちゃいけないから、早く起きなきゃ」

少女は枕元に置かれていた、くまのぬいぐるみを抱いて眠りについていた。

——翌日——。

鳥も鳴くどころか、まだ目覚めたばかりの早朝。

「レティー、さっさと起きな〜」

老婆の呼ぶ声で少女、レティーは起床する。ウェーブがかった美しいブロンドの長い髪は、寝癖でボサボサになってしまっていた。目は半開きで、まだ眠たそうだ。

朝食の匂いだろうか、リビングから良い香りが少女の部屋まで立ち上ってくる。鼻腔をつく香りはどこか甘く、レティーはその匂いにより完全に目が覚めた。

くまのぬいぐるみを枕元へ置き、少女はベッドを出てそのまま部屋から出て行く。

階段を下りてリビングへ向かうと、老婆が丁度ホットミルクを入れていたところだった。

「ババ、おはよう」

レティーは老婆に挨拶すると、老婆も少女に挨拶を返す。

「ん、おはよう。ほれ、さっさと顔を洗ってきな」

「うん」

頷き、顔を洗うために洗面所へと向かう。大人サイズの高さの洗面台は少女には届かない為、レティーでも使えるようにとお立ち台が

置かれていた。

それに登ると蛇口をひねり水を出し、両手で水をすくって顔を洗う。冷たい水が心地いい。洗面台横のボックス棚からタオルを一枚取り出し、タオルを広げて濡れた顔を拭くと、レティはリビングへと戻る。

テールでは、新聞を広げた老婆がすでに着席し、少女が来るのを待っていた。リビングにレティが戻ったのを確認すると、老婆は読んでいた新聞を畳んで先に挨拶する。

「それじゃ、食べようかね。いただきます」

椅子によじ登りレティも着席すると、同じくいただきますと言って食事を始める。

今朝のメニューはパンと鳥獣の卵の目玉焼き、それとデザートにかぼちやのプリンがあった。

「かぼちやのプリンだ！」

少女は嬉しそうに、前のめりになってプリンを見つめる。老婆の作るかぼちやプリンがレティの好物だった。

「これはただのかぼちやプリンじゃないよ。ほれ、あそこを見てくらん」

そう言っただけで老婆は窓際のサイドボードの上を指差した。そこには目と鼻、そして大きな口がギザギザにくり貫かれた、大きなかぼちやが置かれている。

「あつ！ ジャック〜！」

よほど嬉しかったのか、椅子から飛び降りてサイドボードの方へと走っていく少女。

「こら、食事中に席を立つんじゃないよ！」

老婆に怒られて、レティはしぶしぶ椅子へと戻っていく。

「ババ、このプリンはジャックなの？」

「ああそうさ。やっといい大きさになってきたからね。そろそろ復活してもらわなきゃ、手が足りないんだよ、色々と」

それを聞いた少女は満面の笑みで、瞳を輝かせた。

「わちも手伝う！」

「お前はいいよ。魔法の勉強でもしてな」

老婆に申し出を断られたレティは、頬を膨らませてブーブー言っている。

「こいつの良し悪しは魔力の質で決まるんだ。お前みたいに魔力の不安定なヒヨっ子には、まだ任せられないねえ」

「わちだってお手伝い出来るもん……」

老婆にヒヨっ子呼ばわりされ、フォークを持ったままレティはとうとう不貞腐れてしまった。

「……ふ、やれやれ。だったら乾燥だけでも手伝うかい？」

「うん！ ババありがとう！」

手伝いの許可が下りて、少女は大層嬉しそうにはしゃいでいる。

「なら早速、今日からやってもらおうか。絶対に燃やすんじゃないよ！」

老婆にそう言われ、レティは少し困った表情をした。今日はファフニールに会いに行く用事がある。

「ババ、今日はわち、お散歩に行くからダメなの」

そう言つと、それを聞いた老魔女はあからさまに怪しいという顔をした。

「散歩？ それならまあ仕方がないねえ。けど……洞窟には行くんじゃないよ」

老婆は再度念を押す。またファフニールに会いに行つて、今度こそ何かないとも限らない。

自分の目的をこんなことで潰されてたまるか、老婆はそう思つていた。

レティはレティで、老婆に自分の目的を知られていないと思い、内心ホッとしている様子。

互いにそんなことを考えているとは露知らず、少女はパンを手に取り、一口サイズに千切つて口に放り込む。そして砂糖入りのホットミルクを飲んで頬を緩ませている。目玉焼きは黄身の部分だけを上手に残して食べ、残り一口になったパンに黄身に乗せて食べる。レティは目玉焼きの時はいつもこうしている。

そうしてようやくパンを食べ終えた少女は、とっておきの大好物、ジャックのかぼちゃプリンに手を付けようとしていた。

満面の笑みでプリンを見つめるレティに、老婆は声をかける。

「そんなにそれが好きなのかい？」

「うん！」

「他のとそんなに変わらないだろうに」

「ジャックは他のかぼちゃさんよりも甘くて美味しいの」

少女は他のかぼちゃとジャックとの違いを、身振り手振りを交えながら老婆に熱演している。老婆はそれを呆れた様子で見ているが、口元は緩んでいた。

「なら、レティが散歩に行っている間は、あたしがジャックの乾燥を進めておこうかねえ」

そう言つて席を立ち、老婆は食器を片付けに行く。

「うん。わちもすぐにお手伝いするから」

そしてレティは、かぼちゃのおぼけ——つまりはサイドボードの上に置かれた、ジャックのような形の容器に入った、かぼちゃプリンをスプーンですくい味わって食べる。そのあまりの美味しさに、両手で頬を押さえて1人で感激している。

「あまり遠くへは行くんじゃないよ」

「はあい」

老婆の言葉に、スプーンを上に掲げてレティは返事をした。プリンを食べている最中、少女の鼻歌が止むことはない。この歌は、ジャックと共に作った歌で、ジャックを食べる時にはいつも歌っている。

やがてプリンを食べ終えたレティは、ジャックの方へと歩いてい

く。そしてその頭を一撫でするとお礼を言った。

「今日もおいちかったの。また食べたいな」

「何度もこんなことになってたまるかい！」

にへらと笑うレティの言葉を聞いた老婆は、何故かぼやいている。ジャックに向かって手を振ると、少女は洗面所へと向かった。

まず歯を磨き、顔を洗い、そして次に楕円形のヘッドをしたヘアブラシを取り出した。柄の部分にはこの大陸でしかとれない貴重な宝石“レインボークラス”が散りばめられている。

黒狼と呼ばれる魔獣の最高級の毛を使った櫛を髪に当てると、ボサボサの寝癖を丁寧に梳いていく。するとレティの自慢の髪はみるみるうちにその本来の姿へと戻っていった。金色と呼ぶに相応しい、緩やかにウェーブがかかった艶々の髪。誰が見ても綺麗だと言っただろう。

そうして髪を整えた少女はそのまま自室へと向かう。

部屋へ入るとパジャマを乱雑に脱ぎ捨てクローゼットの前へ……しかし一度振り返り、脱ぎ捨てたパジャマをしばし見つめたあと、それをしっかりとたたみ直す。

それからクローゼットの扉を開け、真新しい紫色のローブを引っ張り出すと、頭からすっぽりとかぶり顔を出す。そして両手を袖から出し、服の中に入った髪を外へと出して鏡の前へ。老婆が作ってくれたローブの裾を広げては、体を右へ左へと反らせるレティ。

鏡の隣に置かれた背の低いポールハンガーから、丸めたベルトを取り腰に巻くと、次に魔女の帽子を取り外しそれをサツとかぶった。三角の形をした帽子は途中で折れ、その先端部には小さなかばちやのアクセサリーが付いている。レティが老婆に頼んで付けてもらった物だ。

少女は帽子のつばを持ち少し押し下げる。ようやく準備が整い、さっそく出かけようと思いい部屋を出ようとしたが、レティはその足を急に止めた。

何かを思いついたように机へと歩いていくと、引き出しを開けて中から長方形の缶の箱を取り出す。

その蓋を開けると、中には個包装された様々な種類の、色とりどりのお菓子が所狭しと入れられていた。レティはそこから飴玉をいくつか取り出すと、ローブのポケットへしまふ。そして箱を引き出しへと戻し部屋をあとにした。

階段を下りてリビングへ入ると、老婆がジャックの頭の前に立っていた。どうやらこれから、腐敗防止の為の魔力注入を始めようというところだった。

「ババ、わちちょっと散歩に行ってくるの」

「ん、遅くならないように帰って来るんだよ」

「はぁーい」

手を上げて老婆に返事をする、少女はスリッパをベルト付きの黒いブーツに履き替える。そして勢いよくドアを開けて外へと出て行った。

その様子をじっと見ていた老婆はしきりにあのことを気にしている。

「……本当に大丈夫だろうねえ」

レティがまた、ファフニールのいる洞窟に近付きはしないかと、老婆は気が気でない様子。

家から出た少女は軽快な足取りで歩いていく。帽子に付いたアクセサリーは、歩きたびに揺れては喜怒哀楽とその表情を変化させ、ローブの裾は風になびいてふわふわと踊る。

レティは周りをキョロキョロと見渡し、魔獣の存在を確認しながら歩いていく。どうやら今日は出くわさないみたいだ。

やがて道の分かれ道に立った少女は立て看板を見る。右へ行くとクリーエの街へ。そして左へ行くとカースの森へ。ファフニールのいる洞窟は、カースの森の奥深くにあるため、レティは迷わず左の道を選択する。

そのまま道なりに歩いていくと、森への入口が見えてきた。広大な森は、ある種の不気味さを醸し出しつつも、全てを内包するような温かさも感じられる。

何度も老婆のお使いで来たことのある少女は、この森を熟知している。当然のことながら、混沌の洞窟への近道も知っている。

森へと入ったレティは、その脇にある木々で囲まれた小さなトンネルの前に立った。大きさは、大人では身を屈めてでしか通れないような狭さだ。だが小柄なレティには丁度いい。

目の前のトンネルへと入り、獣道を突き進む。動物たちもここを通るのだろう、レティの足元にはたくさんの獣の足跡が付いている。そうして10分ほど歩くと、トンネルを抜けて広い場所へと出た。少女の後ろにはうつそうと茂った森、そして目の前には、300m程の高さもある断崖絶壁、その中腹まで大きく口を開けた洞窟の入口が見える。

入口の左右には松明が置かれ、上には『ファフニール封印の地』と書かれたプレートが打ち付けられていた。

レティは洞窟の入口に立つと、手の平を上に向け静かに目を閉じ、なにやら魔法を唱える。

空中には複雑な形をした魔法陣が浮かび上がり、白い光を放ちな

がらゆつくりと回転を始めた。

「彼方より来たりち光明、闇を照らせ、ウィル・オ・ウィスプ！」

すると魔法陣は回転速度を増しながら収縮し、少女の前に光の玉のようなものが現れた。球体だったその光は、徐々にその姿を変えていく。

まるで栗のようにイガイガとして、目や口、そして手のようなものが浮き出てきた。

レティが唱えたのは、光の精霊を召喚するための魔法だ。召喚魔法は、数ある魔法の中でも高等魔法に位置する。しかも少女が呼び出した光の精霊、ウィル・オ・ウィスプは、四元素の精霊を呼び出すことよりも遥かに難しいとされる。

「なんだレティか……って、またこの洞窟？　ばあちゃんに怒られるよ？」

光の精霊は少女に大して口を利いた。しかし、呼び出された場所が昨日来たばかりの、しかも老婆に行つてはならぬと固く禁じられている場所であつたことから、精霊はあからさまに嫌そうな顔をした。

「ウィル、ババに言ったらダメだからね」

「まあ言わないけどさ。そもそも、レティがボクを召喚出来ること、ばあちゃんは知らないでしょ」

ウィルは肩をすくめる様な仕草をし、少女の周りを浮遊する。

「だって、言ったら怒られるもん」

「ばあちゃんに黙って、勝手に魔導書を読むからだよ」

もつともな物言いに、少女は頬を膨らませてそつぽを向いた。
レティの機嫌を損ねてしまったのかとウィルは思い、頭をポリポリと搔いて気まずそうだ。

「そんなことより、早く入って用事を済ませたほうがいいんじゃない？ ファフニールに会いに来たんでしょ？ あんまり遅くなるとばあちゃんに怒られちゃうよ」

「あつ、そうだった。行こう、ウィル」

当初の目的を忘れるところだったレティは一瞬で立ち直ると、精霊に声を掛け暗い洞窟内部へと一緒に入ってしまった。

洞窟の中はとにかく薄暗く、とりあえず松明が置かれてはいるものの、まだ昼間だからか1つも灯されてはいなかった。

ここの警備を任されている者たちは王国から派遣された騎士たちで、主に警備は夜間に行われている。そのため、昼間は松明に火を付けないのだ。

しかし召喚したウィルのおかげで、洞窟内はまるで外と同じくらいに明るい。ふよふよと浮かぶ精霊の後ろを、レティはちょこちょこについて歩く。

狭い通路を抜け階段を下り、そしてまた通路を抜け階段を登る。まるで迷宮のような構造になっている洞窟を進むと、やがて広い場所へと出た。

洞窟内部だというのに、この大広間だけは別世界だった。天井はなく空が望め、太陽の光が燦々と降り注いでいる。木々がいたる所に生え、小さな湖までもがあった。光と水、そして緑が織り成す幻想的なその様は、まさに秘境の絶景と呼ぶに相応しい。そんな美しい風景の中で、異色の物体が、特にその存在を主張している。

ヘキサグラムの頂点にそれぞれ配置された、高さ5m程もあるア

メジスト。その魔法陣の中央に、四肢を鎖で繋がれて、少し窮屈そうに折り曲げられた巨大な体躯。まるで闇そのもののような、その体はまさに漆黒。体表はゴツゴツとして、とても頑丈そうな鱗に覆われている。

人の気配を感じたのか、そのドラゴンの耳はピクリと動いた。そしてゆっくりと顔を上げ目を開けると、その人物の方へ紅い瞳を向けて声を上げる。

「なんだ嬢ちゃん、また来たのか？」

黒竜ファフニールは低い声で少女にそう言うと、小さくため息をついた。

レティはまったく臆することなく、巨大なドラゴンへと近付いていく。ウィルはというと、いつの間にやらその姿を消していた。

「わちが来たら迷惑なの？」

「……迷惑ってことはないけどな、大人に怒られるだろう？」

首を傾げて自分を見つめる少女に対し、ファフニールは頭を横に振り答える。

「ところで今日はどうしたんだ？ またお使いか？」

「うっん、今日はおつかいじゃないの」

「そうか、そいつはよかったな。しかし、お使いじゃなけりや何用だ？」

黒竜は頭を地面に降ろし、少しでも少女と視線を合わせようとして対話する。

「今日はファフニールに聞きたいことがあってきたの」

「ほう……聞きたいこと?」

「うん。ファフニールは悪い竜なの?」

ドラゴンを真っ直ぐに見つめ、レティは少し不安げな表情で質問した。あまりにも唐突で漠然とした質問に、ファフニールは数回瞬きをした後少女を見つめ返す。

「いきなりだな。だが……そうさ、俺は悪竜だからな」

ファフニールはケラケラと笑って、得意げにレティに言ってみせる。

「本当? ……人をたくさん食べたの?」

「ああ。喰った」

少女の問いに黒竜は、さも当然のように即答する。

「どうちて?」

「……どうして? 嬢ちゃんよ、竜が人を喰らうのに理由がいるのか?」

「うーん、分かんない。でも、ファフニールは悪い子じゃないと思うの」

レティはファフニールの目の前まで行くと、その場でしゃがみ込んだ。そして、スツと小さな手を差し出して、ドラゴンの鼻を撫でる。

「はぁ。嬢ちゃんは変わった人間だな。悪竜って呼ばれてるんだ。悪い竜じゃないわけがないだろう?」

呆れた様子のファフニールは大きく息を吐いた。レティはその強風に飛ばされそうになりながらも、その場でじっとしている。

「ババは危ないから近付いちゃダメだって」

「……ババ？」

「うん。紅蓮の魔女なの」

「紅蓮？ 紅蓮……もしかしてガーネットのことか！？」

ファフニールは驚き上体を起こす。そして少女の顔をまじまじと覗き込んだ。レティは、いきなりどうしたのかと不思議そうな顔でドラゴンを見上げる。

「……？ そうなの。ファフニールはババを知ってるの？」

「ああ、よく知ってるさ。俺をここに縛り上げた、4人の魔女の1人だからな」

「ババが！？」

まさかあの老婆が、この強大なドラゴンを封じた魔女の1人だったとは思ってもよらなかったのだろう。レティは目を見開いて、大層驚いた様子でファフニールを見つめ返す。

「そうだ……。あれは、嬢ちゃんが生まれたばかりの頃の話だ」

昔を振り返るように遠い目をして、黒竜は語り始めようとしていた。

「……」

「うん？ どうした嬢ちゃん？」

「……話、長くなりそう？」

「まあ少しな。そうだ、ちょっと待ってな」

そう言ってファフニールは、長い尻尾を地面に勢いよく叩きつける。まるで地震でも起こったのかと思うほど地が揺れ動き、木々は激しく葉を揺らし湖はその波紋を広げていく。そして尻尾を叩きつけた衝撃で舞い上がる、手ごろなサイズの岩石を器用に手で掴む。ファフニールは掴んだ岩石を少女の前にそっと持っていくと、それを下ろして即席の椅子を作った。

「嬢ちゃん、そいつに座るといい」
「うん。ありがとう」

レティは作ってもらった椅子に腰掛けお行儀よく座ると、どうぞとファフニールに話をするよう促す。

ゴホンツと一度咳払いをして、黒竜ファフニールは話し始めた。

「俺は生まれた時から体が黒かった。まあ、黒竜として生まれたんだから、体が白いはずはないけどな。成長し体がデカくなって人目につく様になつてくると、やがて俺は悪竜と呼ばれるようになった」

「どうちて？」

「昔から黒い竜は災いを呼ぶんだと。人間たちの伝承だ」

「そんなことで悪い竜にされて、ファフニールがかわいそうなの」

悲しそうな顔をして、少女はドラゴンを見つめる。ファフニールはどう反応していいのか分からず、肩をすくめる仕草をすると話を続けた。

「昔から言われてきたことだ、それはしょうがないと思う。……そして人間たちは俺を退治しようとして競い合った。それはもう何人挑んできたのか覚えてないくらいにだ。俺は沢山の人間を殺し、そして喰った。俺も死んでやるわけにはいかないからな。それに、普通の人間たちの武器じゃ俺の鱗を剥がす事だつて出来やしない。それに気付いた人間たちは、魔力を持つ人間に俺の封印を頼んだんだ。それもとてつもなく強力な魔力を持った人間にだ。それがガーネットをはじめとする、四方を守護していた魔女たちだ」

「四方？」

「なんだ嬢ちゃん、4人の魔女を知らないのか？」

「むー、氷だけは知ってるもん。ババが嫌ってるから」

「はははっ、あの2人は犬猿だからな。しかし、まだ仲が悪いとはなあ」

ファフニールは、当時の2人のやり取りを思い出したのか口を大

きく開けて笑っている。

「あとの2人は？」

「ん？ ああ、東を守護する風の魔女シルヴィアと、西を守護する地の魔女ノーラだ。そして北を守護する水の魔女アリエスと、南を守護する火の魔女ガーネット。この4人が四元素を司る最高の魔女、俺を封印した者たちだ」

「ふうん。……あつ、その左腕もババたちにやられたの？」

古そうな傷を黒竜の腕に見つけた少女は訊ねた。

「ん？ ……こいつは、違うんだ嬢ちゃん」

ファフニールは、少女から視線を逸らし腕を隠そうとした。レテイに知られたくないことでもあるのだろうか、はたまた辛い過去なのか。少し寂しそうに目を伏せて俯いた。

「どうちたの？」

「なんでもないさ」

竜はかぶりを振って短く答える。少女はその様子を不思議そうに見ていた。

「ファフニールはお外に行きたくないの？」

「こんなだからな、外に行きたくても行けないだろ？」

腕に取り付けられた、魔法で特殊加工を施された鎖をジャラジャラと鳴らすと、黒竜は懐かしそうに空を見上げる。

それを見た少女は腕を組み、何かを真剣に考えているようだ。

「はっ！ …… わちがなんとかしてあげる！」

レティは急に立ち上がると、拳を上突き上げて、声高らかに宣言する。

ファフニールは急でビックリしたのか、目をパチクリとさせていた。

「何とかって……いくらなんでも嬢ちゃんには無理だろう」
「むゝ、わちだって魔力くらいあるもん！」

子ども扱いされたことが嫌だったのか、少女はぷうつと頬を膨らませて怒っている。

「うゝん。……魔力があつてもだな、この結界はただでさえ強力な魔女4人分の魔力で作られてんだ。しかもだ、何重にも張り巡らされた四元素の呪界をそれぞれデイスperlしなきゃなんねえし、出来たとしても全体のロックも外さなきゃならん。一人じゃ解除するのに何年かかるかわかんないぞ？」

「んゝゝ。あつ！ なら、ファフニールが小さくなればいいの」

「俺が小さく？ おいおい嬢ちゃんよ、そいつはいくらなんでも無理だ」

「……どうちても？」

「どうしてもだ。そもそも自分の体を小さくする竜言語魔法なんてものは存在しないんだよ。それにこの結界は黒竜を封印するためのもんだ。小さくなったところで変わらんさ」

「うゝん……」

少女は腕を組み、また何かを思索している様子。

長らくまともな会話をしていなかったからか、それとも相手がレティだからだろうか。それを見ているファフニールはどこか楽しそ

うだった。

「あつ！ いいこと思いついた」

レティはアイデアが思い浮かび、嬉しそうに黒竜に駆け寄っている。

「ふむ、まあ聞くだけ聞いてやろう」

「あのね、ファフニールが人間になればいいんだよ！」

少女の言葉を聞いた瞬間、ファフニールはあぐりと口を開けて硬直してしまった。どうしたんだろうと、レティは小首を傾げてドラゴンの反応を待っている。

「俺が人間に？ それこそ無理だぞ嬢ちゃん」

「無理じゃないよ、だって人間が竜に変身できるんだもん」

「——何っ！？ ……今、なんて言った、嬢ちゃん」

「ん？ だから、竜に変身——」

「嘘だろ！？ まさか……そいつはドラグナーの……」

ファフニールは少女の発言に大変驚かされた。右手は震え、そして左腕をがっしりと掴む。ドラゴンは息をのみ、しばらくの間、ただただ目の前の小さな少女、レティを見つめる事しか出来なかった。少女は、目の前で急に黙りこくったファフニールを訝しげに見ている。

「どっちたの？」

「嬢ちゃん、まさかとは思うが……嬢ちゃんが竜化身の魔法を使えるのか？」

「うん！ ババの持つてる魔導書に書いてあったから、面白そうだ

なつて思つて」

「その魔導書、竜言語で書かれてなかったか？」

「うゝん……分かんない。でも、見たことない字だったの」

「そうか。……ちよつと、俺に見せてくれないか？」

ファフニールは真剣な眼差しで少女を見つめると、小さく頭を下げた。

「うん、いいよ！　ちよつと待つてて」

レティは頼みを快く承諾すると、辺りを見回し木の枝を探し始める。

すると、湖の近くに生えている木の根元に枝の切れ端をいくつか見つけた少女は、走つてそれを取りに行く。

自分の手に馴染む大きさの小枝を拾い、ファフニールのもとまで戻ってきたレティは、その場でしゃがみ地面に何かを書き始めた。

まず円を描き、中央にペンタグラムを配した。その周りには幾何学な模様、ペンタグラムの内と外、そして円の内周に沿うように象形文字のような言語を描いていく。

魔法陣を地面に描き終えた少女は、おもむろにその中央に立った。その一部始終を見逃すまいと、黒竜は真剣に見入っている。

「いくよ、ファフニール」

「ああ、頼む」

ファフニールが頷いたのを合図に、レティは魔法を唱え始めた。聞いたこともない言語で詠唱を続けるレティだったが、目の前で聞いている黒竜にはその言語が理解できているようだ。まさかといった表情で、淡々と魔法を唱える少女を凝視し続けている。

魔法陣からは青白いオーラが立ち上り、やがてレティの身体は徐

々に光だし、白かった光は少しずつその色を黄金へと変えていく。
少女の体が完全に金色の光で包まれた頃、ようやく魔法の詠唱が
終わった。

「ドラグマティッド！」

その言葉と同時に、レティに収束していた黄金の光は、一気に輝
きを増して四方八方へと拡散した。

広間を包み込む程の眩い光に、ドラゴンでさえも目を瞑る。しば
らくして光が少しずつ弱まると、瞼を閉じていたファフニールは目
を開けて、少女の居た場所に視線を移す。

「おおっ！ …… って、ち、ちんまいな、嬢ちゃん」

驚いたのもほんの一瞬。それもそのはず、そこにいたのは体長2
mにも満たない、レッドドラゴンの子供だったからだ。

ドラゴンと化したレティは、魔法陣の中央にちょこんと座ってい
る。

「わちの魔力じゃこれが限界だもん」

「……いや、すまなかった。ところで嬢ちゃん、プレスは吐けるの
か？」

「うん！ 見えて」

レティは小さな翼を大きく広げ、息を思いっきり吸い込んだ。そ
して一旦息を止めて、それを一気に吐き出す。すると、ポンツとい
う音とともに小さな火の玉ができたが、その火は空中に留まること
なく、すぐに地面に落ちて消えた。

「はははっ！ 嬢ちゃん、まだまだだな。そんなんじゃ焚き木くら

いしか出来ないぞ」

「むっ」

ふくれっ面の少女を尻目に、ファフニールはおもむろに立ち上がり顔を上空へと向ける。そしてレティをちらりと横目で見ると黒竜は言った。

「嬢ちゃん、プレスって言うのはこう吐くもんだ」

レティと同様、ファフニールもその巨大な翼を大きく広げると、息を吸い込み、思いつきり吐き出した。大広間全体が赤く染まり、少女のそれとは比べ物にならない特大の火球は、プロミネンスを螺旋状に纏いながら天井へ向かって突き進む。やがて天井を抜けるとドラゴンのプレスはどこまでも空へと昇っていった。火球が見えなくなる頃、ファフニールは翼をたたんで少女に向き直る。

「どうだ嬢ちゃん？ って、魔法解けるの早いな」

「わちの魔力じゃ3分も持たないの……」

ファフニールがプレスを吐いている間に、レティの変身はすでに解けていた。レティ自身、ドラゴンのプレスがどれほど凄いのかが身に染みているようだ。ただ呆然と目の前の黒竜を見つめている。

「しかし、本当に竜言語魔法が使える人間がいるとは、思いもなかったぞ。すごいな、嬢ちゃん」

「えへへ」

ファフニールに褒められて、少女は少し恥ずかしそうに身をよじった。

「……こうなると……本当に……」

「どうかちた？」

「いや、なんでもない」

あることを思い出し、気付いたファフニールは少女を注視する。
懐かしい思い出とともに消えた2人の人間。思い出される死闘……。
左腕が疼くのを感じた。

「ところで嬢ちゃん、帰らなくてもいいのか？ そろそろ警備の連中がここに向かってやってくる時間だぞ」

少女は空を見上げる。日が少し傾き、空はオレンジ色へと染まりつつあった。すると、上空のある一点に黒い影を見つけたレティは目を凝らす。その影は徐々に地上へと近付き、ものすごい勢いで大広間に降ってきた。

「なに?!」

爆音をたてて地面と衝突した、砂煙を上げる先の落下物の落下地点を凝視すると、そこにはくる焦げになっている巨大な鳥獣の姿があった。

「ああ、さつき放ったブレスの餌食になったんだな。運のない奴だ。だが、これで今夜も飯にありつける」

「これがファフニールのご飯なの？」

「そうだ。鳥獣どもは頭が悪いからな。ブレスが地上から放たれるって事を学習しないもんだから、こうやってくる焦げになってよく落ちてくるんだ」

そう言つと黒竜は、長い尻尾を使って焼け焦げた鳥獣を手元まで

寄せる。

その様子を黙って見ていたレティだが、急に帰り支度を始めた。地面に描いた魔法陣を消していき、そして小枝を元あった場所へと戻す。

「嬢ちゃん、帰るのか？」

「うん。ババに怒られちゃうから」

「そうか……気をつけて帰るんだぞ」

「うん！」

レティはファフニールに返事をする、大広間の出入口に向かって歩き出す。ところが、数歩進んでその足を急に止めた。そして何かを思い出したようにドラゴンへと歩み寄る。

「ん？ どうした、忘れ物か？」

「ううん」

首を横に振って答える少女の手は、ポケットの中に入れられている。ファフニールの側まで来ると、ゆっくりと手を出す。ドラゴンに向かって手の平を差し出すと、そこには家を出る時に持ってきた飴玉がのっていた。

「これ、ファフニールにあげる」

「なんだ、これは？」

「キャンディだよ、甘くて美味しいの」

そう言っレティは包み紙を外すと、七色の飴玉をファフニールの口元へ持っていく。

「はい、あ〜ん」

「ん？ 口を開ければいいのか？」

少女が頷くと、ファフニールは大きく口を開けた。ナイフのように鋭く尖った牙が並ぶ口の中に、レティは飴を放り込む。

「噛んじゃダメだよ」

不思議そうな顔をしながらレティの言葉に頷くと口を閉じ、黒竜はしばらくしてから声を上げた。

「……うまい。美味しいぞ嬢ちゃん」

瞳を輝かせて喜ぶファフニールの姿に、少女は大変ご満悦のようだ。

「じゃあわち、そろそろ帰るから」

「そうか……。また、キャンディ持ってくるか？」

「うん、また明日も来るの」

「そうか」

にんまりとするファフニール。それを見たレティは、残りの飴をすべてドラゴンの傍らに置いた。

「わちのもあげる」

「いいのか、嬢ちゃん？」

「まだ沢山あるから大丈夫」

「そうか、今度礼をしなくちゃならんな……」

「じゃあまたね、ファフニール」

「ん？ ああ、気をつけてな」

レティはファフニールに手を振ると、今度こそ出入口へと歩いていった。

そして来た時と同様にウィルを召喚すると、再度振り向き手を振って通路へと消えていく。

「ほう、あの年でウィル・オ・ウィスプまで召喚出来るのか……。やはり、疑う余地はないみたいだな。そうか……」

黒竜は静かに呟くと空を見上げる。さっきよりも色濃く染まる夕空を眺めては、遠い日のことを思い出すのだった。地に視線を落とした時そこには、少女がくれた飴玉が3つ、仲良く転がっていた――。

ファフニールのいた大広間から、苦勞をしてようやく洞窟を抜けたレティはウィルの召喚を解除する。

「ウィル、ありがとう」

「はあ、また明日もこき使われるんだね、ボク……」

「キャンディあげるから」

「ボクはファフニールじゃないよ」

皮肉を言いながら精霊の姿は徐々に消えていく。手を振る少女を一瞥すると、小さくため息をつき、そして完全にその姿は消えた。

――すると突然、どこからか話し声が聞こえてきた。どうやら巡回担当の騎士たちが到着したらしい。

少女は見つからないように、急いで森の中へと入り来た道に戻る。獣道のトンネルをひたすら直進すると、やがて森の入口へと出た。森を抜ける頃、夕日は少しずつ西に沈み始める。このままではガ―ネットに怒られる、そう思ったレティは走って家を目指した。

舗装された道路を少女はひた走る。その振動が不愉快なのか、帽子に付いているかぼちゃのアクセサリーは、怒りの表情を崩さない。ようやく長い道の手を経て、ガーネットの家へと着いたレティの足取りはおぼつかない。

ウィッチは魔力はあっても体力が低いジョブだ。レティも例外ではなく、走って相当体力を消耗したようで、肩で息をしている。

ふらふらと玄関へ歩いていき、そしてドアを開けた。

ガーネットは相変わらずテーブルに向かって魔導書を読みふけている。レティが帰ってきたことに気付くと、老婆は視線を外さずに声をかけた。

「ずいぶん遅かったねえ」

「ババ、ただいま」

「ん。さて、晩飯にするか。レティ、帽子脱いどいで」

そう言うとガーネットは腰を上げ、キッチンへと向かう。少女は歩き疲れて棒のようになった足で、多少ふらつきながらも階段の手すりを掴み、なんとか階段をあがると自分の部屋まで戻った。

部屋へ入ったレティは帽子を脱ぐと、スタンドミラー横のポールハンガーにそれをかける。

走っている途中は怒っていたかぼちゃのアクセサリーは、自分の定位置に戻されるとその表情を喜びへと変えた。

アクセサリーが笑ったのを確認すると、少女は微笑みそして部屋を出ていく。

階段をおりてリビングへと足を踏み入れると、キッチンで夕食を作っているガーネットの背中が見えた。

ファフニールの話によれば、老婆は黒竜を封じた魔女の1人ということらしいが、なぜガーネットは話さなかったんだろう……。少女は考え深げに、ガーネットの丸い背中を見つめている。

「レティ、こいつを運んどくれ」

ガーネットは、ボーツと突っ立っている少女に声を掛けると、かぼちゃの煮物が入った皿を差し出す。レティは老婆の方へ歩いていくと、落とさないように両手で皿を支え、テーブルへと運んでいく。次々に差し出される皿を、順にテーブルへ運び終えたレティは自分の席に座る。少し遅れてガーネットも席に着くと、自分と少女のコップへお茶を注ぎ入れた。

「なら、食べるとするかね。いただきます」
「いただきます」

ガーネットに合わせてレティも挨拶すると、2人揃って食事を始める。

ナイフとフォーク、そしてスプーンが食器にぶつかる音だけが響くリビング。

ガーネットはちらりと少女の様子を窺う。

レティはただ黙々と料理を食べ進めている。いつもと様子が違う少女を、不思議に思ったガーネットは口を開いた。

「今日はやけに静かだねえ。何かあったのかい？」

「えっ？ …… ううん、なんにもないの。ちょっと考え事」

それだけ言うとレティはまた黙り込み、食事を続ける。ふーんと頷いたものの、いつもと違う雰囲気には老婆は少しつまらなさそうな顔をした。

「あゝそうだった。レティ、明日はクーリエまでお使い頼むよ」

「えゝ、わち明日もお散歩いくのに」

「なんだい、そんなに大事な用なのかい？」

「うん、大事な用なの」

「……なら仕方ないね。ジャックが出来たら頼むとするか」

ようやくいつもの小生意気なレティらしくなつたと、ガーネットはひと安心したが、気付けば少女は食事を終え、食器を片付けようとしていた。

「もう食べないのかい？ あたしの肉をやるうか？」

「わち、もうお腹ポンプンだもん」

肉の皿を差し出す老婆を尻目に、レティは食器をシンクへと持っていく。

「ババ、ごちそうさま」

そう言う少女は、リビングを出て行きバスルームへと向かった。なにか様子がおかしい。そう思ったガーネットは、1人残されたリビングで寂しい食事を続けるのだった――。

お風呂から上がったレティは、パジャマに着替え髪を乾かし、そしてリビングへと戻る。

リビングでは、ガーネットがティーカップ片手に相変わらず魔導書に向かっていた。

「ババ、おやすみ」

レティは老婆にそう言うのと階段をあがっていく。それを見ていたガーネットは怪訝な顔をしている。

ふと魔導書に視線を落とす。しばらく一点だけを見つめていたが、やがて顔を上げるとあることを思いつく。

「そうだ、レティに監視をつければ……いや駄目か。……でも、明日1日くらいなら……」

ガーネットは魔導書を置き、立ち上がると空中に魔法陣を描いた。レティが召喚したウィルとはまた違った形の魔法陣。複雑な模様、そして禍々しい気配を醸し出す円は、紫に発光し黒い煙が溢れている。

老魔女が詠唱を始めると、少しずつ魔法陣は回転しその輝きを増していく。

「深遠なる闇の彼方、暗黒の岬より来たれ、ルナ・ルミナス！」

魔法陣は光と煙を巻き込みながら収縮し、霧散するとそこから現

れたのは、黒くて長い髪をした少女だった。紫色のローブを一枚だけ羽織った、赤い目をした少女は老婆に視線を向ける。

「あらおばあちゃん、私を呼ぶなんて久しぶりじゃない。いったい何の用かしら？」

少女は艶々のストレートの髪をかき上げながらそう言うと、テーブルの端に腰掛けた。

ガーネットが召喚したこの少女は闇の精霊、ルナ・ルミナス。光の精霊であるウィル・オ・ウィスプと対をなす存在だ。難易度的にはルナを召喚することのほうが、ウィルを召喚することよりも難しいとされる。

基本的に召喚には触媒は必要ない。あるのは精霊との契約だけだ。しかし中には例外もあり得る。

「おばあちゃんじゃないよ！好きでこの姿になったわけじゃない」

「……まあそうだったわね。それで、私になにか用？」

「お前さんにレティの監視を頼もうと思ってねえ」

「監視？ あのおチビちゃんの？ いやよ、めんどくさい」

ルナは嫌そうな顔をして首を左右に振ると、足を組んで不遜な態度を示す。

「どうやら、何か怪しい動きをしてるようなんだ」

「怪しい動き、ねえ。……そんなのほかっとなんかいいじゃない」

「よくないわ！……もちろんタダとは言わない。明日1日働いてくれたら、“ダークマター”をやるわ」

ダークマターと聞いたルナの耳はピクリと動いた。

ダークマターとは、闇の中で生まれた、闇が凝縮された魔石。闇

属性の魔法を使うと、極稀にその周囲に形成されることもある。滅多に手に入らないそれは、ルナの大好きな石だった。

それまでそっぽを向いていたルナだったが、ゆっくりと老婆に向き直ると、その瞳は輝きに満ち満ちていた。

「本当っ!？」

「嘘は言わないよ」

「やる!! やるわっ! ダークマターには代えられないもの」

「なら明日、レティが家を出て行く時にでも、あの子の影に入ってくれ」

「分かったわ」

ガーネットの頼みを、物に釣られて快く承諾した精霊は、一度額くとスーツと消えていった。

——その頃レティは、自室で明日の準備をしていた。

オレンジ色の大きなトートバッグの中に、お菓子の袋を詰め込んでいく。そして机の一番下の引き出しを開けると、分厚い本のようなものを取り出した。

表紙には『まどうしょ』と書かれている。どうやらレティが書いた字のようだ。丁寧に書いたつもりなのだろうが、字体は整っておらず、正直言って下手だ。

その魔導書もトートバッグへ一緒に入れると、少女はようやくベツドへ入り眠りに就いた。

——翌日——。

くまのぬいぐるみを抱きながら目を覚ましたレティは、上体を起こして眠たそうに目を擦る。ベッドから出ると、そのまま部屋を出て階段をおりていく。リビングでは、まだガーネットが朝食の準備

をしている最中だった。

「ん？ レティ、今日はやけに早起きだねえ」

「はやく目が覚めちゃったから起きたの」

目を擦りながらそう言うと、少女は洗面所へと歩いていく。

ガーネットは朝食の準備を進め、出来上がったものをテーブルへと運ぶ。今朝はシンプルにバゲットと目玉焼き、そしてベーコンをバターで炒めたものだけのようだ。出来立ての朝食は湯気を上げて、美味しそうな匂いを漂わせている。

老婆が椅子に座る頃、ようやくレティが洗面所から戻ってきた。

前髪を少し濡らして歩いてくる少女の目は、完全に眠気から開放されている。

「ババ、おはよう！」

「ん、おはよう。ほれ、さっさと座りな」

「うん」

レティも席に着くと、2人は揃って食事を始める。

いつもより機嫌のよさそうなガーネットを、少女は不思議そうな顔をして見ている。

「ババ、なにかいいことでもあったの？」

「ん？ なんでもないさ。いつもと変わらないだろう？」

「そうかな？」

小首を傾げながらも、レティはパンを千切っては食べる。

2人はいつもと変わらぬ会話をしながら食事を続ける。やがて食べ終わると、ガーネットは後片付けへ、そしてレティは洗面所へと向かった。

歯磨き、洗顔、ブラッシングと、いつも通りのメニューをこなし、少女はリビングへ戻ると2階への階段を駆け上がっていく。1日経って足の疲れもすっかり取れたようで、軽快な足取りだ。

自分の部屋のドアを開けて中へ入ると、パジャマを脱いでローブに着替える。そのままポールハンガーに手を伸ばし、帽子を外すと深くかぶった。急に掴まれた為なのか、それとも定位置から離れたくないからなのか、帽子のアクセサリーは哀しみの表情をしている。レティは帽子のことなどお構いなしに、机の横にかけておいたトートバッグを取りに行く。そして再度、中身のチェックをする。…どうやら持っていく物は全て揃っているみたいだ。少女はにこやかに、うんうんと頷いている。

ようやく準備が整ったレティは、バッグを持って部屋を出て行った。

リビングでは、ガーネットがいつもの場所で魔導書を読んでいる。レティに怪しまれない様に、自分自身がおかしな挙動をしないように、いつも通りに振舞おうとしていた。

どこか抜けているようでいて、その実、意外にも鋭い一面がレティにはある。本人にはその自覚すらないかもしれないが……。ガーネットは、今まで何度か指摘されてきたことを少しだけ思い出していた。

するとそこへ、ちょうどレティがリビングへと入ってくる。少女のサイズには合っていない、幅80cmほどもある大きなバッグを肩にかけ、玄関へと歩いていく。

「ずいぶん大きな鞆だねえ、遠足でも行くのかい？」

「ババ、わち、ちよつとそこまで行ってくるの」

「そうかい？　なら、気をつけて行つといいで」

レティに声をかけると、老婆は玄関脇の影へと視線を移す。するとその影からルナが姿を現した。ガーネットは目配せすると、精霊は一度頷いて、玄関のドアを開ける少女の影の中へ飛び込んだ。

「じゃあババ、行つてきまゝす」

自分の影の中にルナが入ったことすら気付かずに、レティは老婆に手を振り外へと出て行つた。

ルナからの報告が今から楽しみなのだろう、少女の背中を見送るガーネットの顔はにやけている。

家から出たレティは、カースの森へと急ぐ。昨日とは違い、今日は少々重い荷物を持っている。しかし少女は歩くスピードを上げた。少しでも早く洞窟に着いて、ファフニールの為に時間を使いたい。逸る気持ちを抑えながらも、レティは森へとひた走る。

森へ着いても少女の足が止まることはない。そのまま獣道に入り、洞窟を目指す。

やがて木々のトンネルを抜けると、少し息を切らしながらも、レティは洞窟入口へ到着した。ただひたすらに森を突っ切ってきたせいで、ローブには沢山の葉っぱがくっ付いている。

少女は服に付着した植物の葉を払い落とす。そしていつものように、魔法陣を描きウィルを召喚した。

光の中から現れたウィルは、どこか疲れた表情をしている。

「ウィル、どうしたの？」

「はあ、なんでもないよ。行こうか……」

そう言つと精霊は、肩を落としながらゆっくりと洞窟の中へ入っ

ていった。

レティはそれを見て首を傾げる。しばらくウィルの後ろ姿を見つめていたが、ハツとして洞窟の中へと消えていった精霊を追いかける。

洞窟の中は相変わらず真っ暗で、ウィルがいなければ、どこをどう歩いていいのかすら分らないほどだ。

「うう……目がしばしばするよ」

「どうして？」

「……寝不足だから……」

少女の少し前に行くウィルは、時折目を擦りながら浮遊している。右へ左へと、その軌道は頼りなくおぼつかない。

道中、何度も道を間違えそうになり、その都度、レティに怒られる精霊。しょんぼりしながらも、少女の為に暗い洞窟を照らし続ける。

やがてファフニールのいる大広間付近に來ると、ウィルは完全に目を閉じ無言のまま消えていった。レティはウィルに礼を言い、1人、大広間への一本道を歩いていく。

暗闇を抜けて視界が開けると、ドラゴンが寝ているのが見えた。少女は、低い寝息をたてるファフニールに静かに近付いていく。忍び足で歩く少女に、ドラゴンはまるで気付く気配がない。しかし、砂地に足を踏み入れた時、履いているブーツが砂と擦れて音が鳴り、それによってファフニールが目覚めた。

ゆっくりと頭をもたげる黒竜の目は、眠気からかしょぼしょぼしており、いまだレティに焦点が定まっていない。

「嬢ちゃんか……今日は少し早いな」

「うん！ 早くファフニールに会いたかったから」

「そうか。ところでキャンディは持ってきてくれたか？」

「うん。でも今日はキャンディだけじゃないの。お菓子いっぱい持ってきたから」

そう言ってレティは、肩にかけたバッグを下ろして中を漁る。そしてお菓子の詰め合わせ袋を取り出して黒竜に見せた。

眠たそうにしていたファフニールは、ほのかに香るお菓子の甘い芳香を嗅ぎ付け、完全に覚醒した。

「おおっ！　しかし嬢ちゃん、昨日貰ったキャンディがまだ残ってるんだが」

ファフニールは自分の手元に視線を移す。そこには、昨日レティが帰り際にあげた飴玉がまだ転がっていた。3つの内の1つは割れて砕けている。

「どうして食べなかったの？」

「食べようとしたんだが……透明の外そうしたら砕けちまって

……」

「そのまま食べればいいのに」

「この透明のは不味そうだろ？」

楽しみにしていたキャンディを食べられなくて、ファフニールは悲しそうな瞳を少女に向けている。その目は涙で潤んでいるようだった。

「しょうがないなあ。わちが食べさせてあげるから」

レティはそう言って黒竜の手元まで歩いていき、地面に転がる飴を拾い上げて包装紙を外す。そしてファフニールの口元に飴を持っていくと、ドラゴンは口を開けて飴を待つ。

「なんだかファフニールって、かわいいの」

「あ……ん？ 可愛い？ なんだそれ。それより嬢ちゃん、キャンディをくれ」

ファフニールは再び口を開ける。少女はその様子をクスクスと笑い、その口に飴を放り込んだ。口を閉じて甘さを味わう黒竜は、目も一緒に閉じられている。

「やっぱり美味しいな。それよりもだ、今日は随分と大きな荷物だな。全部お菓子なのか？」

オレンジ色の鮮やかなトートバッグに視線を移したファフニールは、心なしか瞳が輝いているように見える。

「ちがうの。ファフニールを人間にするための研究をするんだよ。だからほら……」

そう言って少女はバッグから魔導書を取り出した。そして、昨日ファフニールが岩で作ってくれた椅子に腰掛ける。

「魔導書、か？ それは嬢ちゃんのか？」

「そうなの」

「中を見せてくれないか」

「うん、いいよ」

ドラゴンは地面に頭を下ろし、レティはその顔に向かって魔導書を広げパラパラとページをめくっていく。次々にめくられていく魔導書のページを、興味深そうに注視するファフニール。

「ふゝむ……おお、竜言語魔法。そうか……うーん……なに！？」

「ん？ どちらなの？」

なにかとんでもない物を見つけてしまった、そういった様子で黒竜は目を見開いて驚いている。

「嬢ちゃん、2ページ前に戻してくれ」

「うん、いいけど」

レティは不思議そうな顔をしながらも、ファフニールに言われたとおり2ページだけ戻す。

上質な白い紙に赤いインクで描かれた魔法陣、そして複雑な術式と魔法の詠唱文句。ページの上には『めると・ふれあ』と書かれている。魔法名の左に炎のマークが描かれていることから、属性は火だと分かる。

それにしても何故ファフニールはそこまで驚いているのだろうか。少女はドラゴンの顔を見つめている。ページを凝視する黒竜は真剣に目を走らせ、その内容に驚愕していた。

「こいつも、ガーネットの魔導書からか？」

「うん、そうなの」

「……嬢ちゃん、こいつが使えるのか？」

「うん。だってこれに書いてあるのは、ぜんぶわちが覚えた魔法だもん」

レティは得意げに胸を叩いて言った。

「……今、出来るか？」

「うん。それやると、今のわちじゃMPなくなっちゃうから無理

なの」

「そうか……だが、こいつは凄いで、嬢ちゃん」

ファフニールはゆっくりと頭を上げると、少女の目を覗き込む。
レティも上を見上げ、視線を交わすと黒竜は言った。

「ガーネットですら、完璧には使えなかった魔法だ」

「ババが？」

「ああ。今はどうか知らないが、少なくとも、俺を封印した当時はまだ未完成だった」

それに比べてこの小さな少女は……いや、MPが空になるという点ではまだ完全じゃないのかもしれないが、それはただ単純にMPが足りていないということだ。

おそらくまだ小さな炎しか出せないだろう。レティの手を見ても、特に火傷の跡などはない。火炎属性最強の魔法を使っても、術士への反動がないところを見ると、未完ではなく完成されている魔法なのだ。

炎を得意とするガーネットですら完成出来なかった魔法、メルト・フレア。それをこの少女は完成させた。

やはり魔法のセンスがずば抜けている、とファフニールは確信を持って大きく頷いた。

「こいつは禁術と言ってな——」

「きんじゅつ？」

「あまりの威力に使うことを禁じられた魔法なんだ。……って嬢ちゃん知らなかったのか？」

「うん」

ファフニールは少女の即答に、ぽかーんと口を開けて呆れている。

そんなドラゴンを余所にレティは椅子に座ると、魔導書の竜言語魔法『ドラグマティッド』のページを開いた。

上から下へ何度も読み返すと、椅子から降りて魔導書を椅子に置き、その場にしゃがむ。近くに落ちていた小枝を手にとると、地面に何かを書き始めた。

「それは――昨日の竜言語魔法の術式だな。しかしそんなものを書いてどうするつもりだ？」

「きつとこれから人間になれる魔法が作れると思うの」

「なに！？ 嬢ちゃんよ、まさか新しく魔法を作るつもりか？」

「うん、そうなの」

ファフニールに返事をする、少女は黙々と数式のようなものを地面に書いていく。黒竜は、ただ黙ってその様子をジッと眺めている。

静かな広間に、砂地を小枝で掘る音が響いている。

書き始めてから数分後。ようやくドラグマティッドの術式を書き終えたレティは、椅子に座り一息ついた。

バッグから、常備しているウェットティッシュを取り出すと丁寧に手を拭いていく。拭き終わると少女は、お菓子袋からチョコチップクッキーの小袋を1つ取り出した。開封してクッキーをつまむと口に運ぶ。全粒粉のザクザクとした食感がおもしろくておいしい。

物欲しそうなファフニールの視線に気付いたレティは、何も言わずクッキーをその口元に持つていく。黒竜は黙って口を開け、放り込まれたクッキーを味わって食べる。

互いに視線を交わし、にこりと微笑み合う2人。

広間は温かな日差しに照らされ、水面は光を反射しキラキラと煌き、そよ風は葉を揺らして美しい音色を奏でる。2人の間にゆっくりとした時間が流れていく。

クッキーを2人で完食し休憩を終えた少女は、椅子から地面に書いた術式を眺める。その眼差しは真剣そのものだ。

だが、魔法の理論や概念など、少女はまるで理解などしていない。それでよくガーネットに怒られたりもする。しかし、レティは四元素全ての魔法が使える、しかも光までをもこの年齢で扱える。竜言語を理解し、禁術を紐解く程の潜在能力。これは単純に持つて生まれた才能、まさしく天賦の才だと言えるだろう。

ファフニールは、自分の為に一生懸命になっけてくれている目の前の少女を見つめながらも、1人違う風景を見ていた。

7年前の大戦。その時出会った2人の人間。初めて人間と戦うのが楽しいと思えた、不思議な魅力を持った彼ら。ずっと2人と戦っ

ていたかった。しかし所詮は竜と人。結局分かり合えることなどなかった。

死闘の末に荒野と消えた2人。その最期、2人が残した言葉――

『

今にも消えそうな小さな声で発せられたその言葉が、今でもファフニールの耳に木霊する。

「うーん」

どれほどの時間が経ったのだろう。

回想の間、レティは腕を組み、頭を悩ませ、術式を展開しては書き足したり書き直したり。そうして気付けば日は傾き出していた。

「難しいな」

「おお、頑張ってるな嬢ちゃん」

「ファフニール、ちょっと時間かかるかも？」

「そうか。まあ、あまり無理だけはするなよ」

どこことなく面影のある横顔を、ファフニールは温かい眼差しで見つめている。

しばらく術式を見て悩んでいたレティだったが、頭を振ってすつくと立ち上がった。

「やっぱり今日はここまでにする。わち、もう帰るね」

そう言うと、少女は近くに生えていた植物の葉を千切った。1m程もある大きな葉をファフニールの目の前に置くと、レティは持ってきたお菓子袋の中からクッキー、ビスケット、チョコレートにキヤンディを取り出す。そして包装をすべて外すと、葉っぱの上にお菓子を並べていく。

「俺にくれるのか？」

「うん。またババに買ってもらうからいいの」

少女の言葉にファフニールは、口の端から涎を垂らし、瞳を輝かせてお菓子の山を見つめている。

お菓子を乗せ終えたレティは、椅子に置いておいた魔導書を再びバッグへ納めると、それを肩にかけて黒竜のもとへ歩み寄る。

「また明日もくるから」

「ああ。気をつけてな」

挨拶を済ませたレティは広間の出口へと歩いていく。ファフニールは起き上がり、それを少し寂しそうな顔をして見送っている。

言うべきか言わないべきか……黒竜もまた、1人で悩んでいた。

ウィルと共に洞窟を出て、そして召喚を解除し、そのまま森を抜けた少女はふと立ち止まる。

見上げると、綺麗なオレンジ色の空が広がっていた。この広い空を、ファフニールにも見せてあげたい。レティは空を眺めながらも、決意を新たに家路を急いだ。

しばらく歩くと、やがてガーネットの家の屋根が見えてくる。少女はバッグを左から右へとかけ直し、家に向かって駆け出した。家に着くと玄関のドアを勢いよく開けて中に入る。

「ただいま」

しかし、今日は家の中の様子が違った。いつもなら椅子に腰掛けて、魔導書を読んでいるはずのガーネットの姿が見当たらない。少

女は辺りを見渡すと、いつもなら置いてあるはずのある物がない事に気付いた。

それは玄関脇に設けられた、飛行用の箒立ての箒。サイズの小さな箒があるだけで、大きい方の箒がなくなっている。どうやらガーネットは買い物にでも出かけているようだ。

ちなみにこの小さい箒はレティの物。だが、レティはいまだに箒に乗って空を飛ぶことが出来ない。7歳にでもなれば、大抵のウィッチは箒に乗ることが出来る。しかし、少女はいくら練習しても乗れないため、本人はおるか、ガーネットですら半分諦めている。

荷物を片付けるため、とりあえずレティは自分の部屋に戻ることにした。トートバッグを机に置き、帽子を脱いでポールハンガーにかける。そしてバッグから、1つにまとめておいたお菓子のゴミを取り出すと、少女はそれを持ってリビングへ戻る。

キッチンにあるゴミ箱にゴミを捨てると、レティは洗面所へと行き手を洗う。リビングに戻ってきた少女は、食器棚から陶器のコップを手に取り、冷蔵庫の中からオレンジジュースの瓶を出すとコップに注いだ。ジュース瓶を冷蔵庫に戻し、レティは腰に手を当てジュースを一気に飲み干す。するとそこへ、丁度ガーネットが帰ってきた。

自前の箒を箒立てに立てかけて、ガーネットは大きな紙袋を腕に抱えテーブルへとそれを運ぶ。少女はコップをシンクに置くと、テーブルへと走っていった。

「ババ、なに買ってきたの？」

「ん〜？ 鳥獣の肉、卵、牛乳、パン、コーヒー、紅茶、魔草に野菜もろもろ……」

そう言って老婆は、買ってきたものを次々にテーブルへと並べていく。少女は少し不安そうな顔をしてガーネットを見上げる。

「ババ、わちのお菓子は？」

「そんなものあるわけないだろう？」

ガーネットが冷たく言うと、少女は俯き口を尖らせて拗ねている。それを見た老婆は、にっと笑って徐に紙袋の中に手を入れた。

レティが顔を上げた時、テーブルの上にはお菓子の詰め合わせ袋が置いてあった。

「——あつ……ババ、ありがとう！」

期待していなかった分感激はひとしおなようで、瞳を輝かせてレティは老婆に抱きついた。やれやれといった様子で小さくため息をつき、ガーネットは少女の頭を撫でる。

「さあご飯だよ。レティ、手伝ってくれ」

「うん！」

2人はテーブルの上を片付けると、さっそく夕食の準備に取り掛かった。

ガーネットは野菜を切り、それをフライパンで肉と炒める。その間、別の鍋ではジャガイモを茹でる。レティは食器棚から取り皿を出し、ナイフとフォーク、スプーンと共にテーブルに並べていく。

肉の野菜炒めが出来上がり、しばらくしてジャガイモが茹で上がると、ガーネットはジャガイモの皮を剥いてボウルにいれ、ポテトマッシャーと共にボウルをレティに差し出す。

「レティ、こいつを潰しとくれ」

「分かったの」

少女はボウルを受け取ると、テーブルへ持っていき茹で上がったジャガイモを潰す。ガーネットは、輪切りにしたキュウリに塩をかけて水分を絞ったものと、刻んだハムを小皿に乗せテーブルへと持っていく。

「潰し終わったらそれを混ぜて、マヨネーズを入れるんだよ」

「うん」

「それから塩コショウだ」

ガーネットに言われた通りの手順を踏み、やがておいしそうなポテトサラダが完成した。

ボウルからそれぞれの小鉢へとポテトサラダを分け、ガーネットは魔草をそのまま、レティは魔草を粉末にしたものを彩りに添える。そしてあらかじめ作っておいた、かぼちゃのリゾットをテーブルに運び終わると、ようやく夕食の準備が整った。レティの手伝いもあり、今日は7時前に食べられそうだった。

2人は揃って席に着き、手を合わせて食事の挨拶をすると、料理に手をつける。

「ああ、そう言えばレティ、いつになったらジャックの手伝いしてくれるんだい」

サイドボードに置かれたかぼちゃ頭を一度見て、ガーネットは少女に訊ねた。レティはその問いに対し、うーんと唸り腕を組んで悩んでいる。

「やっぱりババがやって」

「なんだい、手伝わないのかい？」

「わち、これから忙しくなるから」

「……そうかい？　なら仕方ないねえ」

心なしか寂しそうな表情で自分の方を向くジャックをしばらく見つめると、レティは視線をテーブルへと戻し食事を続けた。

老婆は、レティが何か悪いことでも企んでるんじゃないかと気が気でない様子だ。

感付いてはいるものの、レティに問いただしたところで正直に言うとは到底思えない。少女はこう見えて意外と頑固者なのだ。

ここはやはり、ルナからの報告を待つしかない。ガーネットはそう思い、少女との食事を続ける。

やがて食事を終えた2人は、それぞれ別々の行動に移った。ガーネットは食器の後片付け、そしてレティはバスルームへと向かう。少女がリビングのドアを開けて出て行った瞬間、その影からルナが飛び出した。

「ご苦労さん」

「まったくよ、あゝ疲れた」

闇の精霊はそう言ってテーブルに腰掛けると、洗いものをしているガーネットの丸い背中に声をかける。

「でも、随分と円くなったわね」

「だから、なりたくてなったんじゃ——」

「そうじゃなくって、性格とか雰囲気のことよ」

「……そうかい？　ところで、レティは今日1日何してたんだい？」

洗い物を終えた老婆はタオルで手を拭きルナに訊ねると、本棚へと歩いていき古い魔導書を手に取ってテーブル椅子に腰掛ける。

ルナは小さくため息を吐くと、魔導書を開き読み始める老婆に話をし始めた。

「円くなったのはガーネットだけじゃないみたい」

「ん？ どういうことだい？」

「ファフニールよ、ファフニール」

「やっぱり！ あの子はあいつの所に行ってるのかい。まったく」

ガーネットはこめかみを手で押さえたため息をついた。案の定、自分の予想していた通りの報告をルナから聞けて、複雑な表情をしている。

「それにしても円くなったって……？」

「おチビちゃんが相手だから知らないけど、なんか時折切なげに見てたのよねー、あの子のこと」

「ふーん。よく分からないが……それで、レティは奴の所へいったい何しに行つたんだい？」

「それがね……聞いて驚かないでよ。あの子、ファフニールを人間にする為の魔法を作るんだって」

「——はあ？」

衝撃、というよりは完全に呆れかえっているといった方が正しいだろう。ガーネットは、鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして固まっている。

「そんなこと出来るわけないだろう」

「でもあの子、竜言語魔法使えるみたいよ」

「……なに！？ あれはだって、ドラグナーしか使えない魔法のはずだよ？ あの子はウィッチだ。確かに才能があるのはあたしも認めてはいるけどねえ」

「そんなこと私に言われても知らないわよ。しかも火の禁術まで覚えたって」

「まさか……。このあたしですら、メルト・フレアを完成させるの

に8年と3ヶ月もかかったっていうのに……レティはあの年でもう使えるのかい……って、また勝手に魔導書読んだのか」

「まあMP足りなくなってる、帰りにウィル召喚できないから断ってたけどねー」

「ん？ ウィル？　ちょいと待ちな……召喚できるのかい？」

顔をしかめ眉間に皺を寄せてそう聞くと、ルナはうんと静かに頷いた。

「あの栗頭、あたしに一言もそんなこと言わなかったのに。今度一発、大きいのも見舞ってやろうか……」

不敵な笑みを浮かべながら手の平を上に向け、老婆は魔力を凝縮させると直径10cm程の火球が出現した。小さいながらもその火の玉は、とてつもない熱量を蓄えている。

これは火の最上位魔法で、メルト・フレアの次にランクされる高難度魔法だ。ガーネットほどの使い手となると、大きさ、効果範囲、熱量などのコントロールが出来るようになる。

威力としては比べるまでもなくこちらの方が劣るが、このくらいの小さな火の玉なら詠唱なしでも使えるのがこの魔法のメリットでもある。

ルナは腕を組み、ウィルが一発見舞われる、その現場を想像して顔を引きつらせていた。

「しかし、奴が人間を前にして喰おうとしないのには驚いたね……」
「私もビックリしたんだから」

「……これは様子を見たほうがいいのかどうか……」

「まあ、おチビちゃんも頑張ってるしね」

「あいつを人間になど出来るわけではないと思うが……ふむ、分かった。お疲れさん。こいつは今日の礼だ、受け取っとくれ」

そう言ってガーネットは、ローブのポケットから5cmくらいの黒い石を取り出した。部屋の照明に照らされているにも関わらず、その石は光を反射することすらしない。むしろ光が石に取り込まれているかのようだ。

ルナは瞳を輝かせ、その石をテーブルから前のめりになって見つめている。

ガーネットが取り出した石こそが、今回のレティ監視の報酬。ルナの好物の魔石、『ダークマター』だ。こんな小さな石ころでも価値は相当高く、闇市などでも滅多にお目にかかることの出来ない稀少品。高価な闇属性の武具製造に欠かせない素材でもある。

光の速さで暗黒石をひったくると、ルナは慎重に品定めをした。

「うん。けっこう上質な魔石ね」

「それはそうだろう。そこいらのウィッチと同じにしてもらっちゃこまる」

「それもそうね」

2人が談笑をしていると、風呂からあがったパジャマ姿のレティがリビングへと入ってきた。普段あまり見かけない闇の精霊をテーブルに見つけた少女は、意外そうな顔をしてルナに声をかける。

「あれ、ルナがいる」

「こんばんは、おチビちゃん。久しぶりね」

「うん。それよりどちらなの？」

「どうもしないわよ？ それじゃガーネット、そういうことだから」

「ああ、手間かけさせて悪かったね」

「本当よ。じゃあね、おチビちゃん」

ルナはレティに手を振ると、そのまま闇を纏いながら消えていっ

た。首を傾げてルナの消えた所をただ見つめる少女に、ガーネットは向き直り声をかける。

「レティ、明日も散歩かい？」

「え？ うん、そうなの」

「そうかい」

「……？ ババ、どうかちたの？」

「ん？ なんでもないさ」

ガーネットは、再び魔導書を手に椅子に座ると、おもむろに開いて読み始める。

——やはりレティはファフニールのもとに行っていた。しかも奴を人間にするための魔法を作ろうとしている。そして人間を前にして襲わないファフニール。昔の奴なら、迷わず喰っていただろう。

少女への行動予測が当たってはいたものの、ガーネットの心中は複雑そうだ。魔導書を読むふりをしながら、ただ一点だけを見つめてボーっとしている。

レティはしばらくその様子を黙って見ていたが、明日も早いということもあり、まだ濡れたままの髪を乾かすべく洗面所へと向かった。

小さな台に上り鏡を見るレティ。壁に吊ってあるドライヤーを手にとると、スイッチを入れて温風を出す。そしてドライヤーのヘッドを自分に向け、風を髪に当てていく。しばらくして髪を乾かし終えた少女は、スイッチを切ってもあった場所にそれを吊りかけ、再びリビングへと戻る。

リビングへ来てみると、魔導書を開いたままガーネットが椅子に座って眠りに就いていた。少女はいったん部屋へ戻ると膝掛けを持つてきて、それを老婆の膝にそっとかける。

「ババ、おやすみ」

ガーネットを起こさないように、少女は小声で挨拶すると2階への階段をあがっていく。

部屋へ戻ったレティは、明日の準備を手早く済ませ、机の一番上の引き出しからメモ用紙を取り出した。ペン立てから鉛筆を手にとり、今日試したドラグマティッドの術式の展開部分を箇条書きしていく。

その作業を終えるとメモ用紙をバッグに入れ、鉛筆を片付けてベッドへ潜り込む。そうしてレティはくまのぬいぐるみを抱いて、今夜も眠りに就くのだった――。

そうして翌日から、レティは混沌の洞窟へと足繁く通いつめた。黒竜を人間にするための新魔法を作り出すために。この可愛そうなドラゴンに、広い空を見せてあげたいと、ただその一心で……。ファフニールのもとへ行き、魔法の研究を始めてからちょうど1週間が経ったある日――。

その日もレティはファフニールのもとにいた。いつもの椅子に腰掛けて魔法の術式を見ては、書き足したり消したりを繰り返す。以前と比べ、その術式自体まとまりある形となり、幾分か長くなっている。数日の間に随分とはかどった様だ。

黒竜は以前と変わらず、その様子を黙って見守っている。すると突然、先程まで聞こえていた小枝が地面を削る音が急に止んだ。

少女はその場でゆっくりと立ち上がると、ファフニールに向き直り声を上げる。

「できた……できたよファフニール！」

そう言って嬉しそうにファフニールのもとへと駆け寄っていくレティ。黒竜は静かに頷いてその努力を称える。

「よく頑張ったな、嬢ちゃん」

そう褒められた少女は満面の笑みを浮かべて喜んでいる。

レティはバッグの中に入っているペンケースを開けると、中から羽ペンを取り出した。そして持ってきた魔導書の新しいページに、今しがた出来たばかりの竜を人へと変身させる魔法を書き込んでいく。

その術式は長く、詠唱文も複雑にはなってしまったが、どうにか完成した新魔法に、レティ自身大変満足しているようだ。

やがて魔法を魔導書へと写し終えた少女は、そのページを黒竜に見せる。

「ファフニール、これを唱えるの」

「……嬢ちゃん、ここまで頑張ってもらって悪いんだがな……俺は魔力を封じられてるんだ。だから無理だぞ」

ファフニールが手足を動かすたびに、嵌められた堅牢なつくりの枷は、繋がれた鎖を動かしジャラジャラと音をたてる。どうやら魔力を放出しようとする、それを押さえ込むための魔法が発動する仕組みになっているようだ。ファフニールの手と足には焼け焦げた跡が痛々しく残っている。

少女はしばらく目を閉じて1人思案する。少しして何か閃いたのか、手をポンツと叩き大きな枝を探し始めた。辺りを見渡すと、入口付近に生えている老木の根元に、50cmほどの少し太い枝を見つけたレティは、走ってそれを取りに行く。

ファフニールのもとまで戻ってきた少女は、黒竜を囲むように描かれた、地面で赤く鈍い光を放つ巨大な魔法陣の中へと足を踏み入れた。

「嬢ちゃん、あまり魔法陣の中へ入ってくると危ないぞ……つてあれ？」

躊躇することなくその歩みを進める少女に、ファフニールは疑問を抱いた。

「平気なのか？」

「なにが？」

「……いや、なんでもない」

平気な顔をして魔法陣の中を歩いてくるレティを、黒竜は怪訝な表情で見ている。

アメジストで作られた魔法陣の中央、ファフニールの腹部付近まで歩いてきた少女は、手にした枝を使い地面に何かを描き始めた。

それは小さな魔法陣で、一般的に無属性の紋章とされる模様が描かれている。それを描き終えたレティは呪文を唱える。するとその魔法陣は宙に浮き、ドラゴンの中央上空に上がって静止した。

「嬢ちゃん、いったい何をする気だ？」

「ババの持つてる魔導書で読んだことがあるの。魔法陣の中に魔法陣を描く方法と、その中だけに魔法の効果を留める方法を」

「ほう……よく分からんが、なかなか高度なことを知ってるもんだ」「見てて」

レティが続いて描いたのは、光と闇の魔法陣。同じく小さなものだったが、それらに魔力を送ることにより、魔法陣は宙に上がり輪を大きくしていく。そして光の魔法陣は無属性の下へ、闇の魔法陣はファフニールの下、地面すれすれで静止する。

そうして最後に描いたのは、四元素の魔法陣だ。地面にそれぞれの模様を円の中に描き、全てに魔力を送り込む。先ほどと同様に、4つの魔法陣は宙に浮き、光の下へ火、水、風、地の順に並ぶ。

「積層型の立体魔法陣か……こいつは初めて見たぞ」

レティが言っていた「魔法陣の中に魔法陣を描く方法」それは、魔法陣の中に描く魔法陣を立体にするものだった。円柱状に配置することにより、それぞれの魔法陣が競合することなく、魔法を扱える状態にすることが出来る。古の失われた魔法の中には、この立体

魔法陣を必要とするものが数多くあったことが確認されている。だが更に、これ以上に技術を必要とするのが、「魔法の効果をその中にだけに留める方法」だ。

再度、円柱状に配した6つの魔法陣に少女が魔力を送ると、それらは光り輝き回転を始める。そして黒竜を中心に、半球状にそれぞれの魔法陣が配置を変えて、並び終わると同時に光のドームを形成した。

「ふう、疲れたの」

「……嬢ちゃん、これからどうするんだ？　こんなものを作っても、俺は魔力が使えないんだぞ？」

「ババたちが作った魔法陣を使うの」

「外の？　……なるほど、そういうことか。その為に無属性魔法陣があるんだな」

「そうなの」

レティのやろうとしていることを理解したファフニールは、大きく頷き天を見上げた。ドームの外には、少女が最初に描いた無属性の魔法陣が浮遊している。無属性は単体ではなんにも役に立たない魔法陣だが、それぞれの属性と組み合わせることで、属性魔法とは少し違った魔法にすることが出来る。

他にも色々な使い方が出来る魔法陣なのだが、この場合の無属性魔法陣は、収束レンズの役割を果たす。

つまりは、昔ガーネットら4人の魔女が作り上げた巨大魔法陣の魔力を、今しがたレティが作った立体魔法陣の内部に、無属性魔法陣の収束効果を用いて魔力を溜めるということだ。

そうすることにより、ファフニールが消耗しているMPの回復もでき、更には魔力を放出してもドームが外からの魔力を遮るため、ファフニールの枷が反応することはない。まさに一石二鳥の案だといえる。

「よく考えたな、嬢ちゃん」
「えへへ」

レティは照れながらもじもじしている。その間にも、アメジスト魔法陣の魔力は無属性魔法陣を通じて、ドーム内へと少しずつ流れ始める。ドームは魔力を蓄えることに鮮やかに発色し、黒竜へとそれは流れていく。MPのある感覚が懐かしいのか、ファフニールはどこか嬉しそうだ。

十数分してようやく本来の魔力とMPを回復したドラゴンは、退屈そうに膝を抱えて座るレティに声をかける。

「嬢ちゃん、もう大丈夫だぞ」

「え？ あ、うん」

「……？ どうした？」

「ちよつと眠いの」

「そうか。それにしても、あのアメジストはどれだけ魔力を蓄えているんだ？ 全快したつてのに、まるで衰える気配が……？」

ファフニールがふとアメジストの根元を見た時、何かに気付いた。

「なるほど、そういうことか。あれはノーラの……」

黒竜が気付いたこと。それは大地に突き刺されたすべてのアメジストの根元に、よく見なければ気付かない程、地面の色に溶け込んだ魔法陣が描かれていた。

これは地の魔女ノーラが施した魔法陣で、地に足を付けている間、大地のエネルギーを自身のMPに転化することが出来るというものだ。その対象は人だけに非ず、魔力を通わすことの出来る接地している物体なら何にでも応用可能という優れもの。

今まで魔力を失っていたファフニールに、このカムフラージュされた魔法陣を見破ることは出来なかった。

1人で領いて何かを納得している黒竜に、レティはドームの外から魔導書を開いて見せる。

「はい、これを唱えるの」

「んー、どれどれ。なかなか長いな……失敗、とかしないだろうな、嬢ちゃん」

「むー、わちのこと信用してないの？」

「いや、そういうわけじゃ」

「はい！読むの。読まないとお菓子あげないから」

「ッ！？……分かったよ」

お菓子に釣られ、ファフニールは渋々了承した。一度大きく咳払いをし、開かれた魔導書に書かれた詠唱文をファフニールは上から順に読んでいく。竜言語は人智を超えたものであるが故に、ドラゴンとそれらを使役および共闘するジョブでしか理解することが出来ないと言われる。

詠唱文は長く、魔導書を2ページ分使って書かれていた。訳の分からない言葉が静かな広場に響く。

ようやく長い詠唱文を読み終えた頃、その体は白銀に輝いていた。そして魔法を発動させるための最後の言葉、魔法名を竜は口にする。

「ドラグマトラ！」

その瞬間その体を包み込んでいた白銀の光は、ドーム内の魔力を巻き込みながら更にその光量を増していく。光によりファフニールの体が完全に見えなくなると、やがて光の中のシルエットはメタモルフォーゼを始めた。巨大な体躯は少しずつ小さくなり、巨大な翼と長い尾はシルエットの中へと消えていき、頭の角も徐々に短くな

っていく。

レティはドームのすぐ近くで、その様子をじっと見入っている。練習なしのぶっつけ本番で、自分の作った魔法が成功するかどうかわからないため、その表情は少し不安げだ。

ドーム内のシルエットがメタモルフォーゼを始めてから数分が経過した。最初の方と比べると、特に目立った変化はなく見た目に乏しい。少女は失敗したのではないかと不安になり、ドームの外でうろたえている。

そんな心配を余所に、しばらくしてファフニールのシルエットは少しずつ変化し始めた。

楕円形だった光は徐々にその面積を縮小し、完全な球体となる。そこからの変化は著しく、段々とその形を球体から人型のシルエットへ変えていく。

レティはほっと胸を撫で下ろし、目の前の人型の光へと視線を移す。その瞳は輝きに満ち、今か今かとファフニールの人化を待ち侘びている様子。

すると突如、ドームの様子が怪しく急変した。立体魔法陣の半円型ドームは大きく波打ち、まるで中から出ようとする何かを必死に押さえ込んでいるかのようだ。周りのアメジストたちも不気味に点滅を繰り返す。

少女は周囲を見回し、その異変に戸惑っている。そしてドーム内に視線を戻したその瞬間、レティが思いもよらなかった誤算が生じた。

黒竜の強大すぎる魔力は、人型になろうとするファフニールの体に留めることが出来ず、そのシルエットが完全に人型となった瞬間に、その全てが開放されてしまったのだ。

立体魔法陣は一瞬で弾けとび、キャパを超え行き場を失った魔力は暴走を始める。周りに置かれていた6柱のアメジストは、その魔

力の塊にぶつかって次々に粉碎された。大広間の壁に当たっては跳ね返り、木々を薙ぎ倒していく魔力の砲弾。

広間内を粗方壊しまわった暴走を続ける魔力は、まるで意思を持っているかのように、この悲惨な状況から逃れようと身を屈めるレティに次の目標を定める。

一直線に向かって飛んでいく魔力の塊に、少女が気付いた時は既に遅かった。黒竜の魔力が、レティのその小さな身体を打ち貫き、そして音もなく消えた。少女はその衝撃で吹き飛ばされ地面に倒れる。

立体魔法陣の弾けた中央、未だに光の中に佇む黒い人型のシルエツト。やがて光がおさまってくると、その姿を露にした。ファフニールの人化が成功したのだ。

ローブのような黒衣を身に纏い、その腕には鎖が巻きついていて、端正な顔立ちの黒い髪をした美青年は、ゆっくりと目を開ける。その瞳はドラゴンであった時と同じ形そして色、真紅の輝きを宿していた。

まだ焦点の定まらぬ瞳で自身の体を見つめるファフニール。

「これが、俺？ ……まるで人間じゃないか」

しばらくの間、人間となった不思議な感覚に戸惑いながらも、彼が改めて自分に起こった現象を自覚するのに、そう時間はかからなかった。

「っと、そうだった。嬢ちゃん嬢ちゃん」

辺りを見渡しレティを探すファフニールは、その惨状に気付き目を見開く。

「こいつは……どうなってるんだ？ 一体、なにが起こった」

薙ぎ倒された木々、大きく抉れた洞窟の壁、そして砕け散ったアメジスト。

——自分が人化している間に何が起こったのか、意識のなかった彼には理解できなかった。レティの心配をしたファフニールは、急いでその姿を探す。すると、砕けて崩れ落ちたアメジストの側で、仰向けで倒れている少女の姿を見つけた。彼は駈け寄ると、優しくレティを抱き起こす。

「おい、嬢ちゃん、おい！」

頬を軽く叩いても、レティが目を開ける気配はない。死の心配をしたファフニールは、少女の頸動脈に触れて脈を取る。まるで人形のような触れた白磁の柔肌は温かく、トクットクツと一定のリズムで脈打っていた。レティが生きている、その事にひどく安心した男は安堵のため息をつく。

「気を失ってるだけでよかった……。しょうがない、気付けに魔力でも送ってやるか」

そう言っレティの額に手をかざし、自身の魔力を送ろうと力を込めた瞬間、ファフニールは自分の体の異変に気付いた。瞬きを数回して、自分の手の平を見つめる。

「あれっ？ 魔法が、使えない。……俺の魔力、どこいった？」

彼はようやくハッとして気付いた。そうして今一度辺りを見渡す。

「まさか、あの時に感じた開放感は、俺の魔力が出てったからか？」

そして……」

ファフニールは目の前で気絶しているレティを見る。外傷は特
ない。よくよく見てみると、穏やかに眠っているようにも見える。

「俺の魔力を、嬢ちゃんが受け止めたのか？」

眠るように気絶している少女の小さな手を、彼は優しく握ると目
を閉じた。

「っ！？ …… やはりそうか。 …… 嬢ちゃんは、ただのウィッチじ
やなかった……」

自身の魔力をレティの中に感じたファフニールは、俯いて一筋の
涙を流した

。零れ落ちた涙の粒は宙で固まり、美しい宝石へと姿を変え、そ
して地に落ちて転がった。「すまなかったな」と聞き取れないほど
小さな声で呟くと、男はおもむろに立ち上がる。

大広間の空いた天井から外を眺めると、空はオレンジ色に染まり
つつあった。

「っと、ここでのんびりしてる暇はないな。早くしないと騎士ども
がやってきちゃう」

魔導書をバッグに入れて肩に掛け、少女を抱きかかえるとファフ
ニールは振り返り、自分の居た場所を再確認したのち広間を後にす
る。約6年もの間、彼はこの洞窟内に封印されていた。苦い思い出
しかない場所だったが、色々と思うところがあるのだろっ、その表
情は愁いを帯びている。

暗い洞窟の闇の中でも、ファフニールの竜の瞳は洞窟内をしっか

りと見据える。途中、道に迷いはしたものの、持ち前の鋭い勘に頼りなんとか洞窟を抜けることに成功した。

暗がりの洞窟から光の世界へと出たファフニールは、目の前に広がる広大な森に驚きを隠せない。

「こんなに大きかったか、カースの森……」

それもそのはず。体長およそ80mのドラゴンから、身長約180cmの人間へと姿を変えたのだ。森が大きく見えても、それは仕方のないこと。

彼は昔、空からこの森を眺めていたため、どの方角に行けば森を抜けられるのかを知っている。そのため、とりあえずは草原が近い西に森を突っ切ることにした。

案の定、昔とそれほど地形が変わらないおかげで、割とすんなり森を抜けることが出来た。森を抜けたファフニールは、腕の中で眠る少女を見つめる。こうして改めて間近に見ても、懐かしい面影を見ることが出来る。

レティを見つめる男の顔はとても優しく、その昔、悪竜と謳われ畏怖されたドラゴンだとは到底思えない。

ファフニールは少女から視線を外し、久しぶりの外界を眺める。

森の外には昔と変わらず草原が広がっていた。背の低い草の上を風が流れる。耳に心地よく響く自然の音。昔は当たり前前に聞けていたものが、今ではとても懐かしく思える。

すると遠くの方から、カラカラと馬車を牽く音が聞こえてきた。音が近付き、男はそちらに視線を向けると、麦わら帽子をかぶった老人と目が合った。「おや？」とその老人は、抱きかかえられているレティを見つけると、ファフニールに声をかける。

「ガーネットさんとこのレティちゃんじゃないか」

「ん？ じいさん、嬢ちゃんを知ってるのか？」

「ああ知つとる。たまにガーネットさん家に魔法道具を届けたりするんでの」

「その、ガーネットさん、とやらの家を教えてくれないか？」

「ああそれなら、この道を道なりに行くと立て看板があるからの、その十字路を右へ曲がって、そのまま真っ直ぐ進めば、レティちゃんが見えるような帽子の形の屋根が見えてくるはずじゃよ」

「ありがとうよ、じいさん。達者でな」

老人からガーネットの家を聞いたファフニールは話を早々に切り上げ、暗くならない内にレティを送り届けようと、魔女の帽子屋根の家へと向かい歩き出した。

道路の右手に草原を眺めながら、ファフニールは教えられた道をひた歩く。陽は西に沈み始め、少し風が肌寒く感じられるようになってきた。

……嬢ちゃんは寒くないだろうか。

彼は時折少女の顔を覗き込み、まだ目を覚まさないことを心配している。

レティの帽子のアクセサリーは、いつもの揺れ方と違うことに何か物足りなさを感じているのか、哀と楽の表情を交互に入れ替える。しばらく歩くと、老人が言ったとおり十字路に差し掛かった。

その分岐点には立て看板があり、カースの森とクーリエの街を案内している。来た方角から見て左、つまりは南の方角へと続く道を行けば、ガーネットの家へと辿り着く。

ファフニールは左の道を曲がると、そのまま道なりに進んだ。

意外に歩いてみるとけっこう疲れるものだなど、男は、この長い道のりを荷物を提げて毎日通ったレティを見て感心している。

「……お菓子、たべたいの……」

少女の寝言にファフニールは微笑み、そして帰路を急ぐのだった――。

洞窟を出てからおおよそ30分。ようやく魔女の帽子屋根の家が、目視出来る距離まで近付いてきた。

ファフニールは自分でも気付いていないだろうが、レティを抱く力が自然と強くなっている。

まだ一緒にいたいからなのか、それとも、何かを恐れてなのかは分からない。その表情は曇り、寂しさを滲ませている。

——その頃ガーネットは——

相も変わらず、椅子に腰掛け魔導書を読んでいた。

ふと窓の外を眺めては部屋へ視線を戻し、壁に掛けられている時計を見る。まだレティは帰ってこない。

長時間細かな字を見て疲れたのか、老婆は時々目を擦り、目頭を押さえては肩を揉む。

ルナからの報告を受けてからというもの、レティは混沌の洞窟に毎日のように通っている。もちろんガーネットが心配をしていない訳はないが、ルナが言っていたように、ファフニールの様子が昔と違うということ。そのことを考えると、別に放っておいても大丈夫なのか？ という思いも頭をよぎる。

なににせよ、黒竜がレティを喰わないということに対して、老婆は安心しきっていた。

一通りのマッサージを終え、再び魔導書を読もうとページをめくった瞬間、タイミングを見計らったかのように玄関のベルが鳴らされた。レティならベルを鳴らさずに入ってくるため、客人なのは間違いない。

ガーネットは立ち上がり、また何かの勧誘か？ と面倒くさそうな顔をして玄関へ向かう。

「勧誘なら間に合ってるよ、とつとと帰んな！」

ドア越しに、外にいる人物に対して、ガーネットは冷たくそして強く言い放つ。するとドアの向こうに立っている人物は、凄む声に物怖じせず返答した。

「大事なお届け人なんだが……」

いつもの勧誘じゃないことを声で確認すると、老婆は玄関のドアを静かに開け放つ。

そこには、20歳くらいの背の高い好青年が佇んでいた。しばらく見なかったイケメンに、「ほう」と熱の籠ったため息を漏らすガーネット。しかもその腕には、大事そうにレティが抱きかえられていた。

「レティ！？ いったいどうしちまったんだい？ …… 貴様、この子になにかしたのかい？」

先程まで青年を見る目がうつとりとしていたガーネットだったが、レティの姿を見た次の瞬間、青年を見るその眼光が急に鋭くなる。それと同時に、老婆の魔力が増幅し充実していくのがはっきりと見て取れる。体からは赤いオーラのようなものが立ち上り、青年を睨むその眼差しは殺気に満ちていた。

しかし青年は、それに臆することなく平然とした態度で答えた。

「なにもしてないさ。ただ、気を失ってるだけだ。……それよりも、久しぶりだな、ガーネット」

憂いを帯びた表情から一変し、キラキラと光る竜の瞳を老婆に向ける青年。

ガーネットは新手のナンパかと思い、適当に青年をあしらう。

「はあ？ あんたなんか知らないね。死にたくなければ、その子を置いてとっと帰んな！」

「……まあ無理はないか。お前、ファフニール封印の地の監察役のクセに、封印してからというものの一度も来てないだろ」

「なっ！？ …… あんた王国の人間かい？ いちいち説教しに来るんじゃないよ！」

「違う違う。俺はファフニールだ」

「はあ〜？ 馬鹿も休み休みのいいな！ ファフニールが人間になれるわけないだろう」

そう言つて老婆は、手をひらめかせながら顔を背けた。男はそんなガーネットの側まで寄ると、顔を少し突き出して目を大きく見開く。怪訝そうな顔をしながら、そんな青年の瞳を見入る老婆。

すると、普通の人間にはあるはずのない特長がその瞳から見て取れた。真紅の瞳はドラゴンのそれと同じ形をしており、昔に見たことのある感覚を覚える。

「——まさか……？」

「そのまさかだ。嬢ちゃんのおかげでな」

「……まあ、中に入んな」

レティを抱きかかえるファフニールを、ガーネットは渋々家の中へと招き入れる。リビングのソファに寝かせるように指示すると、男はそれに従い少女を寝かせた。すやすやと小さな寝息をたてて眠るレティに、ファフニールは毛布をかけると、テーブルの椅子に着席する。

「おい、誰が座つていいと言つた」

「そんな固いこと言うなよ。慣れない体でここまで来たんだぞ。座らせてくれてもいいだろう？」

「ふん。……それで、一体なにがあつたんだい？」

「まあ、簡潔に言うとな……嬢ちゃんに魔力取られた」

「はあ？」

男の言葉を聞いたガーネットは、口を開けたまま固まってしまった。そんな老婆を尻目に、ファフニールはソファで眠る少女を見つ

める。

「本当に不思議な子だな」

「——そう言えば、どうしてあんたはレティを喰わなかったんだい？ ルナから喰おうとしないうって聞いたけどさ」

「ルナ？ ああ、闇の精霊か。そう言えばいたな、嬢ちゃんの影に」
「気付いてたのかい？」

「まあな。どうせお前が嬢ちゃんの心配して監視を付けたんだろう
と思って、嬢ちゃんには言わなかったけどな」

「ふん。なかなか気が利くじゃないのさ」

そう言っただけでガネットは席を立ち、急須を持ってお茶を入れに行く。しばらくしてキッチンから戻ってくると、ファフニールの分の湯飲みにもお茶を注ぎ入れた。「サンキュー」と言っただけで男は湯飲みに口を付け、お茶をすする。

「で、どうしてレティが気を失ってるんだい？」

「話すと長くなるから、そこら辺は割愛する」

「なんだいそれ」

心地よく眠るレティを、男は今一度見る。その悲しそうな眼差しに気付いたガネットは、ファフニールに尋ねた。

「——どうした？」

「ガネット……」

「ん？」

「嬢ちゃんの両親を知っているか？」

「いや、知らないね。そもそもレティとは、あんたを封印してから下界に修行に出た時に出会ったんだ。とある森の奥深くに聖域みたいなところがあったねえ。そこには古ぼけた小屋があったんだ。中

から変なじいさんが現れたんだが、この子を預かってくれって言われてね……あたしは断ったんだけど、なんか目の前で急にじいさん死んじゃってさ」

「そうか、だから引き取ったのか」

「まあ、おチビのクセして中々の魔力持ってたからねえ。立派なウイツチに育てて、あたしの変わりにあんたの監察変わってもらおうかと思つてさ」

「なるほどな……」

湯飲みをテーブルに置くと、ファフニールは目を伏せて俯いた。ややあつて、ゆっくりと目を開けると静かに語り始める。

「——嬢ちゃんの両親を殺したのは、きっと俺だ」

「なんだって!？」

「あれはそう、7年前の大戦の時だ」

「封印の1年前か……」

ファフニールはおもむろに左の袖を捲くつて見せる。露出した左腕には一本の大きな傷跡が残っていた。切られた、と言うよりは、むしろ溶かされたと言ったほうが近いかもしれない。傷周りの皮膚は隆起し波打っていた。

その見事なまでに傷つけられた腕を見て、ガーネットはほう、と感嘆の息を漏らす。

「随分と大きな傷だねえ」

「こいつは嬢ちゃんの父親がつけた傷だ」

「ただの人間があんたに傷を？」

「あれはただの人間なんかじゃない。俺と心の中で会話が出来たからな」

「心の中って……まさか」

「そう、ドラグーンだ」

「レティの父親はドラグーンだったのか……にしちゃ力がちつとも成長しないねえ」

「問題なのは父親の方じゃない。ドラグーンはそこまで珍しいジョブでもないしな」

「確かに……ドラグーンが黒竜にそれほどの傷を付けられるとはあたしも思っていないけどさ……」

ガーネットは再び男の傷跡を見る。

ドラグーンは確かに強い。特に力と素早さの成長が著しく、体力とその他のパラメーターも均等に上がっていくバランスタイプだが、他のジョブとは決定的に異質の能力を有している。それは竜言語が理解可能であること。そして何より、竜と親しみを持ち共闘出来るということだ。

しかし、ドラグーンはMPがほとんど上がらない。よって魔法を覚えないし扱うことが出来ない。ファフニールのこの傷は、明らかに魔力が通った斬撃によるものだ。

——父親が問題でないとすれば、母親が問題なのか……。

ガーネットはテーブルに頬杖をついて思料する。すると、記憶の大海に眠っていた、ある情報が脳裏をよぎった。

「ま、まさか、レティの母親って……」

「……ドラグナーだ」

ドラグナー。そう聞いたガーネットは震えながら、ソファの上で気持ちよさそうに眠るレティを一瞥し、そしてファフニールへと視線を戻す。

ドラグナーとは、伝説と謳われる数少ないジョブの1つ。

人間は生まれたその瞬間から、得意な魔法の元素というものが既に決まっについて、それは生まれた月と星に関連している。

1年の12ヶ月。四季にはそれぞれの元素が当てられており、春は風、夏は火、秋は地、そして冬は水。星の動きにより例外が生じることもあるが、基本的にはこれに則る。ジョブチェンジをしたとしてもこの条件は変わらない。

しかしドラグナーはその法則に一切当てはまらず、全ての元素魔法を扱える唯一のジョブなのだ。更には竜を従える力を持ち、竜に安らぎを与える事が出来るとされる。

レティが四元素全ての魔法を扱い、竜言語を理解し唱え、禁術を紐解いた程の魔法のセンスを有しているのは、母親であるドラグナーの血によるもの。

「おかしな奴らだった。人間と戦うことが、初めて楽しいと思えた。いや、あいつらだったから楽しかったのかもしれない」

ファフニールは遠くを見つめ、当時の大戦を思い出すように語り始める。

——7年前、某草原にて——

大地を轟かす甲冑を纏った騎士たちの大軍団。その先頭上空にはレッドドラゴンに乗る1人の青年。

好戦的な笑みを浮かべてはいるが、どこか優しそうな顔をしている。髪は短く赤色で、その瞳は青だった。黒の鎧を来て、その手に鋭い槍を持ち、腰に剣を携える。竜と共闘するもの、ドラグーン。

青年の背中に抱きつくように、女性もまたドラゴンの背に乗っていた。鼻筋の通った整った顔立ち。髪は美しいブロンドで、まるでシルクのように滑らかな、色素の薄いその髪は光に透けて輝いて見えた。大きな瞳は空のように澄んだ青。一目で美人だと分かる。伝説と謳われるジョブ、ドラグナー。

ドラゴンの咆哮を合図に、銀色の甲冑を着込んだ大隊は左右に割

れ、素早く陣形を両翼の陣へと移行する。

青年はファフニールから距離を取り、陣の中央に小隊を率いて指揮をとる。攻撃準備が整うと、ファフニールを囲うように開いた両翼の騎士たちに、角笛で開戦の合図を送った。

一斉に駆け出した騎士たちは、ファフニールに攻撃を仕掛けるも、その硬い鱗に武器を弾かれて攻撃が通らない。

砲撃部隊の放った銃や大砲も、黒竜の鱗を貫通すること叶わず。尾の一撃でなぎ払われその身を碎かれる者、プレスで焼かれ消炭にされる者。ファフニールの強暴な力によって次々に命を落とす騎士たち。

やがて最後に残った小隊の騎士たちは、戦意を喪失し逃亡を図る。その姿が目映った黒竜は、広域のプレスで彼らを焼き払う。

プレスを上空に逃げて回避した青年は、鎧を溶かされ燦る騎士たちの死体を見て激昂した。自分のせいで皆を死なせてしまったと青年は後悔する。

ドラゴンを駆り、ファフニールへ突撃する青年。ファフニールはタイミングを合わせて火球を放つ。ドラゴンは宙でひるがえりプレスを避けると、素早く黒竜の真後ろをとった。

青年は飛び上がり、ファフニールの背中に槍の穂を向けダイブする。しかし着地と同時に突き立てた槍はファフニールの体に刺さらない。それどころか穂先は碎けて散った。

そこへレッドドラゴンの追撃。爪を思いつき尾に近い背中に叩き付けると、青年を乗せ上空へ飛び、火球を飛ばす。ドラゴンとドラゴンの連携攻撃。

もちろん黒竜に大したダメージは与えられない。しかし、ちよろちよろされるのが目障りなのか、ファフニールは振り向きざまに超高熱のプレスを吐き出した。螺旋状に炎を纏い猛スピードで飛んで

くる火球を、体勢を整えようとホバリングしているドラゴンに避けられるはずはなく……。

青年は女性を抱き上げ地上に逃れる。青年のドラゴンはファフニールのプレスで焼かれ、地に堕ちて激しく身悶えた後、その息を引き取った。

黒竜の力を侮っていた。自分の目の前で黒い墨となった、親友を失った悲しみは青年の心を、そして戦意を大きく揺さぶる。青年は戦友の亡骸に誓った。ファフニールは必ず討つと。

立ち上がり、腰に下げた剣を鞘から抜き放つ。その刀身は透明に近い青色だ。ドラゴンの体内でしか生成されない、「ドラグマテリア」と呼ばれる鉱物から極僅かしか抽出されることのない、特殊な金属で出来ている。

女性は青年の脇に立ち、手にするその剣に掌をかざすと竜言語魔法を唱えた。すると剣から青白いオーラが立ち上る。これはドラゴンの持つ特殊武器に対してしか効果が現れない、ドラグナーのエンチャント魔法だ。エンチャントされた刀身はドラゴンの硬い鱗をも断つことが出来る。

久しぶりに楽しめそうな相手に出会えて嬉しいのだろうか、ファフニールは翼を大きく広げて咆哮する。

駆け出す青年に、黒竜は大きく腕を振りかぶり鉤爪の一撃を放つ。青年はそれを飛んで避けると、その腕に思いっきり斬りつけた。しかしファフニールは寸での所で、翼を使い前方に爆風を巻き起こす。青年を吹き飛ばすと同時に、自身はその反動を利用して距離を取る。女性はその着地を見計らい地属性魔法を唱え、地面から鋭い石柱を出現させて攻撃する。

想定していた事とはいえ、その数と範囲に避ける術もなく、ファフニールの体は石柱に刺されダメージを受けた。

体勢を立て直し、尾で石柱をなぎ払うと黒竜は2人に向けて広域のブレスを吐く。青年は女性の前に立ち、女性はブレスダメージ軽減のシエルター状の防護膜を作り出す。――瞬間、2人はブレスに飲み込まれた。やがてブレスが治まると、巻き上げられた砂煙の中から2人は姿を現す。

戦闘は更に激化し、このような事が三日三晩続けられた。互いに疲弊しながらも鎬を削る。そんな時、青年は黒竜に問いかけた。「なんでお前は戦うんだ？」と。

ファフニールは青年に答えた。「お前たちのような奴らが来るからだ」と。

最早戦うことが宿命となっているファフニール。そんな黒竜に青年は言った。「きつと俺たちは、いつか分かり合える日が来るはずだ」と。黒竜はその言葉を聞き流す。

しかしそんなファフニールの中で、不思議な感情が芽生えつつあった。彼らと戦うことが楽しい。今までの人間とはまるで違う何かを彼らは持っている。こうしていつまでも彼らとやり合っていたかった――。

「しかし、いつまでも戦ってなんかいられない。あの2人も、もう体力と魔力は底を尽きかけてた。双方共に次が最後の一撃だ。俺はあいつらに感謝したよ。闘うことの喜びを教えてもらった。だから最後の一撃は誠心誠意、全霊をもって相手しようと思ってな……黒竜最強の魔法で」

「黒竜最強の魔法？ まるで想像がつかないねえ」

「アビスの炎を召喚するんだ。その黒炎は全てを無に還す。寿命が縮むからあまり使いたくはなかったけどな。……下界にあるクローネの瓦礫の荒野、知ってるだろう？ あそこはもともと巨大な街だった。あれを荒野にしたのは俺だよ。もう150年ほど前の話だが

な」

「とんでもない威力じゃないか！」

クローネとは、およそ150年ほど前に繁栄していた大都市の名前だ。特に魔導と機械関連の技術力に優れており、それらの交易が盛んで人々の暮らしは潤い、歴史的に見ても美しい都市だった。――が、ある時黒竜の襲来を受けることになる。

ドラゴンは基本的に光物を好み集める習性がある。ファフニールも例外ではなく、クローネの盛んな貿易により都市に流れ込む大量の貴金属類が、たまたま彼の目に止まったのだ。

しかし若かったファフニールは、それが浅い考えで軽率な行動だったことを思い知らされることになる。

クローネには軍事の設備が整っており、魔導と機械を融合させた技術で、対ドラゴン用の魔封ネットや魔導砲なるものを完備していたのだ。

当時の彼には、今ほどの凶悪な力が備わっておらず、魔封ネットに絡め取られ魔導砲による集中砲火を浴びることとなる。生命の危機に瀕したファフニールは、自身の寿命を縮め、『アビス・フレア』を放った。

絡みつく魔封ネットは一瞬で蒸発し、都市は黒炎に飲まれ破壊され、人々は都市と共に消え去った。その被害範囲は約3,500km²。残ったのは、砂地から都市の一部を覗かせる瓦礫と見渡す限りの荒地だけ。

この災厄による人的被害は、死者数およそ1000万人を超える。

小さく息を吐いたファフニールは一度目を閉じ、ゆっくりと開けると再び話を続けた。

「あいつらは最後、俺のアビス・フレアに対抗するために自分たちの命を燃やしたんだ。ドラグーンとドラグナーが揃って初めて使える禁術。それでも、俺の魔法には届かなかった……。2人は騎士たちの死体と草原もろとも吹き飛んだ。残ったのは、炎が燦る荒野だけだ」

レティの両親を殺した事実を、ガーネットへ告白したファフニールは大きくため息を吐いた。ガーネットはそんなファフニールをただ黙って見つめている。

「消え行く中であの2人が、今にも消え入りそうな声で口にした最期の言葉が、今でも俺の耳に響いてるよ」

『レティ』

ファフニールは疲れた顔をして目を伏せた。ガーネットは、冷めたお茶を一口すすると、一息ついて湯飲みをテーブルに戻す。

しばらくの沈黙が、リビングの空気を重くした。

それに耐え切れず、先に沈黙を破ったのはガーネットだった。

「なるほどねえ。ドラグーンとドラグナー、その2人の子供がこの子かい。どうりで魔法のセンスがあるわけだね」

「ドラグナーはドラゴンの魔力を自身の魔力に転化させることが出来る、という伝えを昔聞いたことがある。ただの伝説だと思つてたが……」

「それでレティは気絶してるのか」

「ああ、恐らくな。……しかし、不思議な子だな。みな俺を恐れてあまり近付かないのに、この嬢ちゃんは恐れるどころか、友好的に接してくれた。俺もこの子だけは喰う気になれなかったよ。それどころか……」

ファフニールはくすりと笑うと話を続けた。

「俺がこんなこと言うのもなんだけどな、嬢ちゃんと一緒にいると安らぎを覚えるんだ。心が開放されていくみたいだったよ。きっとそれは2人の……両親の血の影響なんだろうな」

「ふん、なんだかやけに喋るじゃないか。そんなにお喋りだったのかい？」

「竜だつてたまには喋りたいもんだ」

男は湯飲みを持つと、茶を一気に飲み干す。ガーネットにお代わりを請うと、「自分で入れろ」とあしらわれた。ファフニールは急

須を持って湯飲み茶を注ぐと、老婆を見て問いかける。

「それよりガーネット、お前はいつまでその姿でいるんだ？」

「……あんたがやったんだろ！」

もの凄い剣幕で怒鳴られるも、彼はその事実をしばらく思い出せないでいた。

「そうだったか？ ……ああ、そう言われてみればそうか。もとの姿に、戻りたくないか？」

「ふん。何を今更。それに、魔力を失った今のお前に呪いを解けるわけがないだろうが」

「なに言ってるんだ。呪いは魔力となんら関係ないんだぞ。言わば一種の技みたいなもんだ」

「そうなのか？」

「どうす——」

「——戻る。……っていうか戻せ、殺されなくなかったらな」

ガーネットはファフニールが言葉を発するよりも先に、自分の願望を口にした。その表情は頼む、というよりむしろ凄んで威嚇しているようだ。

「脅しかよ」

男は慌てて立ち上がると、老婆の側へと近寄っていく。そしてガーネットをその場で立たせると、ファフニールは人差し指を伸ばして彼女の額へとつける。目を閉じてなにやら呟くと、ガーネットの周囲に異変が起きた。

黒い煙のようなものが一瞬で彼女を包み込み、それは卵のような形を形成していく。しばらくすると煙状だったものは固体となり、

それに網目状の亀裂がほとばしる。卵は上の方から音をたてて割れ、黒い殻がフローリングに飛び散った。床に散らばった破片はもとの煙に戻ると、そのまま音もなく消えていく。

割れた卵の中から現れたのは、先ほどまでの醜悪な老婆ではなく、若くて美しい女性だった。

均整のとれたプロポーション。切れ長で意思の強そうなその瞳は鮮やかなグリーン。肩にかかる赤に近いストロベリーブロンドの髪は、軽くウェーブがかっている。

真紅のドレスを思わせるローブには大きくスリットが入っており、そこから覗く白い肌は艶やかでなまめかしい。

このなんとも妖しげな魅力を振りまく美女こそが、本来のガーネットの姿である。

今までは“黒竜の呪い”を受けて醜い老婆の姿にされていたが、ようやくもとの姿に戻ることが出来た。黒竜を封印した時に呪いを受けた為、この姿になるのは実に約6年振りである。

ちなみに他の3人の魔女は呪いを受けておらず、老婆にされたのはガーネットただ1人だけだった。

紅蓮の魔女は高圧的な視線をファフニールに向けると、ふん、と鼻を鳴らして椅子に座り足を組む。

「ようやく戻れた……まったく」

こめかみを押さえ俯くガーネットを、嬉しそうに男は見つめている。

「ふむ、やっぱりこっちの方がいいな」

「……お前のせいで……お前のせいで……」

この6年間、色々と苦勞をしたのだろつ。ガーネットは拳を固く

握り締め、その身体は怒りのあまりわななく。何かを閃いたように立ち上がると、一瞬にしてメルト・フレアの小火球を右手に出現させた。

詠唱なしで使ってしまった辺り、火事場の馬鹿力的なものが働いたのだろう。15cm程の火球はまるで小型の太陽のように光を放し、表面はマグマのように対流してプロミネンスを巻き上げては渦巻いている。メルト・フレアは使用するMP量により火球の大きさを増大させ、その分詠唱も長くなっていく魔法だ。ガーネットのMPを使い切って作り出したメルト・フレアの威力は計り知れない。

「そもそも、何であたしだけなんだい！」

「お、おい。落ち着け……」

怒気、いや、明らかに殺意を含んだ瞳で男を見据えると、ガーネットはじりじりとにじり寄る。玄関の方へゆっくりと後ずさり、その距離を離そうとするファフニール。

「いや、話せば分かる……はず」

「3回くらい死んでみるか？ ええ！？」

とうとう玄関のドアまで追い詰められたファフニールは、レティの方を見て助けを求めた。しかし少女は寝言を言うだけで起きる気配はない。一触即発の空気の中、空気を読めない何者かによってそのドアはいきなり開け放たれた。

「うお！？」

ドアにへばり付いていた男は、そのまま外へと後転していく。それを開けた人物が、何事もなかったかのように紙袋を持って家の中へと入ってきた。

「いや、疲れましたよガーネット……って、なんてもの出してるんですか！」

ガーネットの形相と手の平の火球に驚いたその人物は、紙袋を投げ出して床に伏せる。宙を舞いリビングに散乱する食料たち。バゲットは回転しながら彼女の頭に直撃する。その衝撃で我に返った魔女は、今しがた帰ってきたばかりの人物へと視線を向けて声をかけた。

「なんだジャックかい。随分と遅かったじゃないか」

今思えば、部屋の様子が以前と違い、サイドボードにあったはずのかぼちゃの頭がなくなっているのに気付く。彼女が見つめる視線の先には、そのかぼちゃの頭が床に伏せていた。

黒い紳士風のスーツを着て赤のマントを羽織り、赤の手袋とオレンジ色の変った形をしたブーツを履いている。

レティがファフニールのもとに通っている間に、どうやらジャックは復活したようだ。

正気を取り戻したガーネットを床から見上げ、ジャックはゆっくりと立ち上がると服に付着した埃を払った。こうして立ち上がってみると、頭が大きいだけで身長はそれほど高くないことが分かる。いわばずんぐりとした体型だ。

「いや、街で子供達が遊んで欲しいというもので、つい遊んでいたらこんな時間に」

「まったく、相変わらずだねえ」

「それにしても、その姿を拝見するのは久しぶりですね。もう呪いは解けたんですか？」

「え？ あ、ああ……まあ、な」

「おや？ あそこにいるのはレティですね」

ジャックはソファの上にレティを見つけると、嬉しそうに駆け寄っていく。すやすやと眠るレティを覗き込むと、かぼちゃは数回頷いて少女の頭を撫でた。

魔女はそんなジャックを見ながら、まずいと言った表情で1人何かを考え込んでいる。

「おいお前、俺のことはシカトかよ」

いつの間に家の中へと戻ってきたのか、かぼちゃの背後を盗ったファフニールは、その肩を叩いて自分の方を向かせる。見慣れない顔の人物が、自分を上から覗き込んでいる。ジャックは目の前の男を不信に思い、戸惑いの表情を浮かべながらガーネットに視線を送った。

「え？ あの、ガーネット、こちらの方はどなたですか？」

「失礼な奴だな。俺はファフニール——」

「ハッ！ ちよいとお待ち——」

彼女があることを危惧し、ファフニールが名乗るのを制止しようとしたものの、既に言葉は発せられ、時すでに遅し。ジャックはわななき、その体は一瞬にして閃光に包まれる。

「ファフニール、伏せな——」

「えっ？」

ガーネットの言葉に男が振り向いた直後、かぼちゃは爆音と共に木っ端微塵に弾けとんだ。その爆風により、人間となったファフニールは軽く吹き飛ばされ、ガーネットにぶつかって倒れる。リビン

グの床には、爆発で砕けたジャックの頭の欠片がいくつも音をたてて落ちた。

「いってゝ。何なんだよあのかばちゃは。いきなり爆発しちまったぞ」

「ジャックはあんたの名前を聞くと、自爆しちまうんだよ」

「なんでだよっ!? ……まったく、失礼な奴だなー」

「あんたが言うな! って、いつまで人の上に乗っかってんだい、この変態!」

吹き飛ばされ倒れこんだ先がガーネットだった為、ファフニールは彼女に覆いかぶさる形となっていた。一言謝罪の言葉をかけると、男は頭を押さえて立ち上がる。ガーネットは着衣の乱れを整えて、そそくさとファフニールから離れると、髪を指で巻いてクルクルといじり出す。

変わり果てたかばちゃの残骸を目にした魔女は、大きくため息をついた。

「あゝあ、こりゃレティが悲しむわ」

「嬢ちゃんが? なんだ」

「ジャックは、レティの唯一の友達なんだよ」

「そっ、なのか……それはすまなかった」

反省した様子で辺りを見るファフニール。『かばちゃ頭、自爆して死亡』という三面記事にも載らなそうな惨劇の現場がリビングに広がっていた。

そのリビングには微かにかばちゃの芳香が漂う。その匂いを嗅ぎ付けたのか、レティは目を覚まし起き上がると、まだ半開きの目で辺りを見渡す。

「ようやく起きたかい、寝ぼすけ」

少女は聞いた事のない声の発せられた方へ、目を擦りながら顔を向ける。するとそこには見たこともない綺麗な女性が立っていた。不思議そうにその女性を見つめると、レティはその人に声をかける。

「お姉ちゃんだあれ？ …… あれ、ババはどこなの？」

「なに言ってるんだい、あたしがガーネットだよ」

混乱する少女にガーネットは近付き、そしてソファに腰掛ける。もう一度目の前の女性を凝視すると、レティは首を傾げた。

「ババなの？」

「ババじゃないよ！」

「ババじゃないの？」

「いや、ババだけど……ん、ほら見る！ あんたのせいでややこしい事になってるじゃないのさ！」

女性が声を荒げて見た方向を、少女はつられて一緒に見る。するとそこには、またしても見たことのない黒衣の青年が立っていた。しかしレティはその青年の瞳を見た瞬間にあることに気付いた。ドラゴンの瞳をしている。それは見慣れた形、そして色をしていたのだ。

「ファフニー、ル？」

「おい、なんであたしは分かんないんだ」

「ああ、そうだぞ嬢ちゃん。おかげで外に出ることが出来た、ありがとうな」

口を尖らせて拗ねるガーネットを余所に、2人は互いに見つめ合

う。レティは毛布をどかしソファから下りると、青年へと駆け寄り抱きついた。初めて作った自分のオリジナル魔法が成功したこと、そして何より、ファフニールに大空を見せてあげられたことが嬉しかった。

男はそんなレティの頭を優しく撫でる。まるで労るように、愛でるように。母親とそっくりな美しいブロンドの髪は、触れるたびさらさらと揺れる。すると少ししてファフニールから離れると、少女はうな垂れる女性へと視線を移した。

「ねえファフニール、あの人誰なの？」

「さっき言ってただろ？ あれはガーネットだ」

「ババなの？」

「ああ。あれが本当の姿だ」

「どうしてババになってたの？」

「それは……まあ、俺の呪いで……」

ガーネットはソファから立ち上がり、2人のもとへ歩いていくと男を指差して言った。

「こいつのせいでね、あんな醜い婆さんにされてたんだよ！」

「そうなの？ ババ……綺麗なの」

「えっ？ あー、そうかい……って、もうババじゃないって言うてるだろう！」

美貌を褒められ満更でもなさそうな顔をしていたガーネットだったが、自分の呼び名を改めないレティに対して再度声を荒げる。2人はいつも通りの言い合いをしている。呆れ顔であしらうガーネットと、それをなんとも思わず意見するレティ。ファフニールはそんな2人の様子を優しく見守っている。

しかし完全に目が覚めた少女は、かぼちゃの匂いに気付いたのか

リビング内を見渡した。そこかしこに散らばる物体を発見したレイはそれに驚愕する。

しゃがんでその欠片を1つ手に取った。

「これ……ジャック……なの？ ババ、どうちて？」

「そりゃファフニールがいるからねえ。名乗っちまったのさ、ジャックに」

「そんなあ」

非常に残念そうに肩を落とす少女に、ファフニールは「すまない」と頭を下げて謝った。レイはショックで言葉も出ないようだ。

「まあ、また種から育てればいいだろう？」

「でも……」

「またジャックのプリン作ってやるからさ」

「——本当！？」

ジャックのプリン。やはりレイはかぼちゃのプリンに目がないようだ。大のお気に入りかまた食べられる、そのことがよほど嬉しいのだろう。ジャックがまた居なくなつたというのに、少女の瞳は輝きに満ち溢れている。うまい事レイの機嫌取りに成功したガーネットは、ほっと胸を撫で下ろした。

その間、ファフニールは1人浮かない顔をして考え事をしていた。——レイに謝らなければいけないことがある。かぼちゃ頭の親友を失った後だから、余計に言うのに気が引ける。でも言わなければ……。

「嬢ちゃん」

「え、なに？」

ガーネットと会話をしていたレティは、振り向いてファフニールを見上げた。見上げた彼の表情はとても思い悩み沈んでいる。

「どちらなの？ ファフニール」

「……俺は、嬢ちゃんに謝らなければいけないことがあるんだ」

「お、おい、ファフニール」

ガーネットは話そうとしていることを察し、咄嗟に口止めしようと彼の方へ歩み寄ろうとした。だが男はそんなガーネットを一瞬睨み、目を伏せて首を横に振った。ファフニールはその場でしゃがみ、レティと視線を交わす。黒竜だった時と同じように……。その眼差しはいつになく真剣そのものだった。

「俺は7年前……嬢ちゃんの両親を殺した」

「えっ？ ……パパと、ママ？」

「すまない」

ファフニールは神妙な面持ちで頭を下げて謝った。少女は顔を上げた彼の目を見つめ返すと、腕を組んでなにか悩んでいるようだ。「どうした？」そうファフニールが聞こうとした瞬間、レティの口から思いもしなかった言葉が飛び出した。

「別にいいの」

「えっ？」

「はっ？」

切なげな表情を浮かべて顔を伏せていたガーネットも、レティの言葉に啞然として顔を上げる。

「嬢ちゃん、別にいいって……」

「だってわち、パパとママのこと、覚えてないんだもん。……それに――」

少女はガーネットに振り向いて続けた。

「ママはババだからいいの」

「……レティ……」

ガーネットはレティに母親だと言われ、胸が熱くなるのを感じた。4年しかまだ一緒にいない、血のつながりもないこんな自分を、レティは母親だと言ってくれる。彼女はレティと過ごしたこの4年間を思い出した。

子供が嫌いだった彼女には戸惑いもあった、苦勞もあった。子育てなんかしたこともない為に挫折しそうになったことも幾度とある。泣き止まないレティに苛立ちを覚えることもあった。魔法の扱いが下手で、いつまで経っても覚えないことを何度も怒った。

家事洗濯食事、一人分余計に手間がかかる事も頑張った。一緒に風呂に入ったり、魔獣を追い掛け回して遊んだこと。いつの間にか上達していた魔法のスキル。才能を持ちながら中々それが発揮できず、影での努力を怠らなかったレティ。それを沢山褒めたこともあった。辛いことばかりじゃなく、楽しい思い出も、この4年間は数え切れないほどもある。

ガーネットは走馬灯のように蘇る記憶に目頭が熱くなった。

「そうか。……ありがとうな、嬢ちゃん」

「それよりも、ファフニールはどうしてババをババにしたの？」

ハッとして目に溜まった涙を拭くと、ガーネットは彼に突っかって問いたです。

「あたしも聞きたいね！　なんであたしだけなんだ、あの氷の女にすればよかっただろ！」

ずいずいと迫り来る紅蓮の魔女の迫力に気圧され、たじろぎながらもファフニールはその問いに答えた。

「ああ。小さい頃に好きな子をいじめたくなるっていうあれだよ。まあよくある話だ」

「なんだいそれ。そんな事であたしをババアにしたのかい！」
「好きな子？」

少女は首を傾げて2人のやり取りを眺めている。

「嬢ちゃんもいつか分かる時が来るさ」

「わちも？」

「そうだ。嬢ちゃんは好きな奴いないのか？」

ファフニールに聞かれ、腕を組んで頭を悩ますレティ。うーんと唸り真剣に考えて1つの答えを導き出した。

「わちはファフニールが好きなの」

レティが満面の笑みでそう答えると、ガーネットは目を見開いて少女に一度振り返る。そして振り向きざまにファフニールの胸倉を掴むと、ドスの効いた低い声で聞いただす。

「まさかあんた、こんな小さな子になんか仕出かしたんじゃないだらうね？　こ、このロリコン！」

「ロリコン？　なんだそれ。なにもしてないさ、というか、嬢ちゃんの前でそんな話をするなよ」

2人はレティを余所にどちらからともなく取っ組み合いを始めた。そんな2人を不思議そうな顔をして見ていた少女は、あることを閃きそれを2人に伝える。

「ファフニールがパパになればいいの」

レティの言葉を聞いた瞬間、2人の動きがピタリと止まった。2人は揃って少女を見ると、純粹で真っ直ぐな視線が2人を交互に見つめ返す。ガーネットは顔を引きつらせながら、眼差しを自分たちに向けるレティに聞き返した。

「ははっ、レティ、冗談だろ？ まさかこいつをここに住まわせる気かい？」

「だってファフニールは住む所がないの」

「しかしだねー……」

「ババ、お願い」

切なげな表情を自分へと向けて懇願するレティに、ガーネットの心は痛み波打った。

ドラゴンから人間になったこの哀れな男の為に、娘が必死にお願いしている。しばらく悩んだ後、ガーネットはある条件を提案した。

「分かった。……ただしだ、条件がある」

「条件？」

魔女は振り返り、男を見ると指差して言った。

「あなたには、かばちゃ畑を担当してもらう」

「はあ？ なんて俺が畑仕事などやらねばならんだ」

「……お前な……ジャックが自爆したのは……あんたのせいなんだぞ……あれ作るのに……いったい……何ヶ月掛かると思ってるんだ……」

声を震わせて俯き、ガーネットはファフニールの我侭で否定的な答えに身体をわななさせる。

「貴様、何様のつもりだい？」

今までの表情とは一変して、顔を上げた彼女の目つきは鋭く豹変していた。その様子を見ていたレティは、あたふたと慌てふためき男へ駆け寄ると、ローブの裾を引っ張っては小声で事態の深刻さを教える。

「ババが『貴様』って言った時は、本気で怒ってる時だから早く謝ったほうがいいの。今まで何人も黒焦げにされてるから」

少女の忠告を聞いたファフニールは震え上がり、顔面蒼白になりつつも態度を改めてガーネットに謝る。

「わ、悪かったなー、ガーネット。……は、畑仕事はー、俺に任せろ……うん」

手の平から既に火球を出し、放つ用意をしていたガーネットだったが、彼の謝罪の言葉を耳にしていったん火球を鎮める。

「……だつたら、とつとと種でも蒔いといで！」

集めたかぼちゃの種を入れた小袋をファフニールに投げつけると、ガーネットは彼を家からつまみ出す。レティはそれを笑って見てい

だが、思わぬとばつちりを食う事になった。

「なに笑ってんだい！ お前もだよ！」

「えゝ、どうちて？」

「あれだけ近寄るなど言った洞窟に近付き、あげくファフニールまで連れ帰ってきたんだ。当たり前だろ！ 今日から2人で畑やりな」
「むゝ」

少女は不貞腐れて、外へ投げ出されたファフニールの後をとぼとぼと追う。

ガーネットはようやく静かになった部屋で1人立ち尽くす。小休止するためソファに腰を下ろした直後、外から笑いあう声が聞こえてきた。レティとファフニールの楽しそうな声。その音に耳を傾けながら、紅蓮の魔女はため息をついた。

「ふうゝ、やれやれ」

これから3人での生活が始まる。彼女は少しの不安を感じつつも、レティと新たな同居人との共同生活に楽しみも感じるのだった。

6年前の封印戦争の折、ファフニールを封印した4人の魔女の1人。紅蓮の魔女ガーネット。

レティと出会い共に暮らす中で、母性というものが少しずつだが芽生えてきた。レティのおかしな行動に頭を悩ませる事もしばしば。これからはその“おかしな行動”の結果により、ファフニールとも共に暮らすことになった。

かつて悪竜と恐れられた漆黒のドラゴン、ファフニール。翼も魔力も失いはしたものの、彼は人間となったことを後悔はしていない。かつて戦い殺してしまった者達の娘と出会い、ファフニールの人生

は大きく変わる事となった。

その黒竜の力を小さな身体に宿した、伝説のジョブ。ドラグナーの少女レティ。彼女は新たな家族と共に、これからも生きていく。天真爛漫で自由奔放な彼女の成長が楽しみだ。

ガーネットが窓の外を眺めた時、丁度2人は種蒔きを終えて家へ戻ってくる所だった。

ソファからゆっくりと立ち上がりキッチンへ向かうと、帰ってきた2人に手を洗うように指示する。2人が洗面所へ向かうのを微笑みながら確認すると、ガーネットは、1人分多めの夕食作りを始めるのだった――。

08（後書き）

『小さな魔女とファフニール』をお読みくださり、ありがとうございました！

ジョブ・ストーリー1作目はウィッチのお話でした。

本当は1作目は別のお話だったのですが、魔女の話が先に思いつきまして、それは後回しと言うことに……。

とりあえず世界観は共有していますが、直接的に繋がっているわけではないので、その予定していたものが書き終わったら、順番を入れ替えようかなと思っています。

ちなみに次のジョブはまだ未定ですが、複数設定は終わっているの
でぼちぼち書き始めようかなと思っています。

読んでくださった皆さま、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4437p/>

小さな魔女とファフニール

2011年11月15日08時44分発行